

シノペー通貨変造事件

山 川 偉 也*

I ヒケシオスとディオゲネス

クセノフォンがコテュオラを發つてシノペのハルメネ港に入つて停泊したのは、前400年5月から6月にかけてのある日のことであつた。このとき、ディオゲネスはすでにこの世に生まれてゐた。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（以下 DL と略す）6.79.5では「第113回オリンピック大会期（前324-321年）の頃」にディオゲネスは「老齡であつた」とあり、そして DL.6.76.3では「彼は90歳近くで生を終えたと言われている」と言われている。ディオゲネスの没年を推測させる有力な証言であるが、これとは別個に『スダ辞典』も、ディオゲネスはアレクサンドロス大王がバビロンで死んだのと同じ年（前323年）に生を終えたと記載している¹⁾。この記事は、プルタルコスが『倫理論集』収録「食卓談義」8巻の1において、「あるひとの言うところによると」と断りながら、「アレクサンドロス大王と犬のディオゲネスの最期は同一の日に起つた」と報告していることと符合する²⁾。そしてプルタルコスのこの報告はまた、ラエルティオスがデメトリオスの『同名人録』に拠りながら「アレクサンドロスがバビロンで死んだのと、ディオゲネスがコリントスで死んだのとは同じ日であつた」と言っていること（DL.6.79.4）とも合致する。

* 本学法学部

キーワード：ディオゲネス、通貨変造事件の真相、パラハラクシス

これらの証言が正しいとすれば、ディオゲネスは前323年6月10日にコリントスで死んだことになる。アレクサンドロス大王が前323年5月末にマラリアの一種かと思われる病原菌に冒されて高熱を発し、バビロンの王宮で32歳8ヶ月の生涯を閉じたのは、同年6月10日のことだったからだ³⁾。しかし、ディオゲネスとアレクサンドロスが同年同月同日に死んだなどという話は、いかにも出来すぎで、容易には信じがたいと思うのが当たり前である。が、他方、これを反証する年代学的証拠が提出されているわけでもない。

さて、ディオゲネスが前323年に没し、そのとき彼が、ラエルティオスの言うように、ほぼ90歳であったとすれば、彼の生年は前413年頃に比定される。しかしケンソリヌスは、これとは違う生年を唱えている。彼は、ディオゲネスが齢81で世を去ったと言う⁴⁾。そして『スタ辞典』によれば、ディオゲネスはアテナイにおいてクリティアスを首魁とする30人専制政治が吹き荒れていた前404年の10ヶ月の間に生まれたことになっている。

ディオゲネスの生年は前413年頃なのか、それとも前404年頃なのか。これに決着をつけるには何か他の有力なパラメーターが必要である。が、残念なことにそのようなものは存在しない。したがってわたしたちはディオゲネスの生年を、一応、前413年頃ないし前404年頃としておかねばならない。すると、クセノフォンたちの船団がシノペのハルメネ港に寄航したとき、ディオゲネスは13歳ないし14歳くらいであったことになるだろう。

では、通貨変造事件はディオゲネスが何歳くらいのときに起ったのか。これに決着をつけるためには、彼の父親ヒケシオスのライフ・スパンが解明されなければならない。当該事件が起こりえたタイム・スパンは、ディオゲネスの生涯と彼の父親ヒケシオスの生涯が重なりあう期間に落ち着かなければならないからだ。

では、ヒケシオスが生まれたのはいつ頃であろうか。また、出生にかか

シノペー通貨変造事件

わる彼のルートはどこに求められるであろうか。第1の問いに答えることは比較的簡単である。ヒケシオスが25歳から20歳頃にディオゲネスを生んだと仮定すると、彼の生年は前438年～433年、ないしは前429～424年頃だったということになるだろう。そこで、いま仮に上限を採って、ヒケシオスが生まれたのは前438年だとしてみよう。すると、その当のヒケシオスの父親、すなわちディオゲネスの祖父のほうは、前463年～458年頃に生まれたことになるだろう。

他方、ヒケシオスの出自が、シノペにペリクレスが送りこんだアテナイ人植民たちの一人に由来するであろうことには、ほとんど疑いがない。彼はミレトスに繋がる人間でも、またシノペ生え抜きの現地人でもなかったはずだ。何故なら、ヒケシオスは「銀行家」(トラペジテス τραπεζίτης)であったとされているが、只の銀行家ではない。問題の通貨変造事件が起ったとき、彼はシノペの「公金を扱う銀行家」、通貨発行にかかわる国の最高責任者、いわば造幣局長官に相当する役職に就いていた。しかも当時のシノペは、依然として現地シノペに定住したアテナイ人が牛耳っていた。彼らが、自分たちの利益を損ないかねないミレトス人や現地人に、造幣局長官のような重要な役職を委ねたとは考えにくい。

想い起こそう。ペリクレスがアテナイに植民を送りこんだのは前444年、そしてクセノフォンがシノペにしばらく滞在したのは前400年のことであった。この間、44年の年月が経っている。これは、ギリシア風に言えば一人の人間の「アクメー」(盛年)に相当する期間である。アテナイ人が当地にもたらした民主制はすっかり定着していたであろう。したがって、役職者の任命はアテナイ人統治者の発議に基づいて市民たちの投票によって決せられたであろう。シノペのその政治体制は、その後も、おそらくカッパドキアの太守ダタメスがシノペの統治に介入する前370年代初頭に至るまでは、変わらなかったであろう。いかなる記録文書も、この間における

シノベの政治体制上の変化を伝えてはいない。したがって、ペリクレス来訪から起算しておよそ60年間というもの、シノベは、人脈のうえでも文化的伝統のうえでも、依然としてアテナイに繋がっていたと考えなければならない。

したがってヒケシオスは、ペリクレスが送りこんだアテナイ植民たちのうちの一人を父としてシノベで生まれたものと考えられる。するとヒケシオスの父、すなわちディオゲネスの祖父は、前464年頃に生まれ、シノベに定住してヒケシオスを産んだときには、少なくとも26歳にはなっていただろう。何故なら、彼が25歳でヒケシオスを生んだとすると、シノベに定住したとき彼は19歳であったことになるが、これは、20歳以下の者に実戦にかかわる兵役を課さなかったアテナイの慣行にはなじまないからだ。

すると、ヒケシオスの父に当たるこの人物の名前は、「ディオゲネス」だったかもしれない。ギリシアには、現代まで続くひとつの慣習、すなわち祖父の名を孫が受け継ぐ習慣があるからだ。ところで、ディオゲネスの父親がアテナイゆかりの人間であったということは、彼について語るうえで重要な意味をもつ。何故なら、ディオゲネスが生い育った家庭の環境、その文化的バックボーンは、アテナイの伝統のそれであったということになるからだ。すると、ディオゲネスにとってアテナイは、たんに見知らぬ遠い異国であったのではなく、祖父や両親との会話を通じて幼少年時代から親しんだ父祖の地であったことになる³⁾。いや、その場合ディオゲネスは、A. A. ロングが示唆したように⁴⁾、問題の通貨変造事件が起こる前に、父祖の地であるアテナイに遊学し、いろいろなことを見聞する機会をもったかもしれない、ということにもなる。この想定にもしもなんらかの現実性があるとすれば、その遊学の時期は、ディオゲネスが実社会に出て働くようになる前、すなわち青少年時代だったと考えるのが自然である。

これは、単なる推測にすぎないわけではない。ディオゲネスには、通貨

シノペー通貨変造事件

変造事件が起こる前からの知人がアテナイにいたと思われるからである。
DL. 6. 23.2を見ていただきたい。

「ある人に手紙を出して、自分のために小屋をひとつ用意してくれるように頼んだが、その人が手間どっていたので、メトロオンにあった大甕を住居として用いた。」

この逸話は、シノペを出奔したディオゲネスがアテナイに足を踏み入れた最初の日々の状況を伝えるものと考えられる。その最初の日に先立って、ディオゲネスはアテナイに知人をもっていたわけだ。では、その当の知人と、ディオゲネスはいつ交友関係を結んだのか。通貨変造事件以前、彼が最初にアテナイを訪れたときでなければなるまい。

さて、これまでの推論は、ヒケシオスがシノペ生まれであることを前提にして行われてきた。もちろんしかし、彼自身がシノペにペリクレスが送りこんだアテナイ人の植民志願者600人のうちの一人であったとする想定が成り立たないわけではない。が、これは、いささか無理な想定である。プルタルコスが、ペリクレスがケルソネソスに連れていった「1000人に上るアテナイの植民」に言及して、それらの植民を「元気のいい人々（でもって）」(εὐανδρία)と形容しているが、ペリクレスがシノペへ送った最初の入植者たちもまた、当然、彼らと同じく屈強な若者たちであっただろう。そこで、仮にいまヒケシオスがそうした入植者の一人であったとして、年齢は25歳であったとしてみよう。すると彼は、56歳ないし65歳でディオゲネスを生んだことになるだろう。これはしかし、いわば定年退職時の人の年齢である。そして、「ディオゲネス伝」の通貨変造にかかわる逸話(DL. 6. 20.1, 20.2, 20.3, 20.4)が報告していることとも整合しない。

DL 6. 20.1によれば通貨を変造したのは父親のヒケシオスであって、息

子ディオゲネスはその巻添えを喰って追放されている。不思議なことに20.1は、ヒケシオスがこのときどのような目に会ったかについては口を緘している。他方、20.2によると、父親と息子の立場が逆転して、ディオゲネス自身が通貨を変造したことになっている。そしてヒケシオスは、その責任を取らされてか、息子と一緒に追放されている。20.3は、20.2と同様に、通貨を変造したのは「自分自身だ」と自著『ポルダロス』のなかでディオゲネスが言っている、と報告している。そしてヒケシオスについては、やはり、何も語らない。最後に20.4では、通貨変造に手を下したのは「職人たちを監督する立場にあった」ディオゲネス自身だったと言われている。

これら4つの逸話が含意する事柄は、細かく見れば、互いに微妙に食い違う。しかし、共通していることもある。通貨変造事件が起った時点で、ディオゲネスが成人だったと前提している点がそれだ。この前提に基づけば、問題の通貨変造事件は前393年以前には遡りえなくなる。すなわちその事件は前393年を上限として、それ以降に起ったことになる。では、その下限はいつに定められるか。

20.1、20.2によれば、ヒケシオスとディオゲネスの親子は、同一の通貨変造事件に関与した者として一緒に処罰されている。他方、20.4によれば、ディオゲネスはそのとき職人たちの「監督者」であった。「監督者」(ἐπιμελητής)という言葉には解釈の余地がある。この言葉は、ディオゲネス自身がそのとき造幣局全体を監督する立場、すなわち長官職にあったという解釈を許す。しかし、ヒケシオスとディオゲネスが同時に造幣局長官であることは不可能である。したがって、20.4を20.1ならびに20.2と関連させて読むかぎり、一方でディオゲネスは貨幣を造る工場の監督として、他方でヒケシオスは造幣局全体を管掌する長官として責任を問われたことになるだろう。そして実際、21.1によれば、父親から預かっていた通貨をディオゲネスが変造した結果、ヒケシオスのほうは投獄されて死に、ディ

オゲネス自身は追放されたということになっている。

すると問題の通貨変造事件は、ヒケシオスが長官職を勤めていた間に起ったことになる。つまり当の事件が起こりえた最下限は、ヒケシオスが長官職に留まりえた最後の年ということになる。では彼は、もしも問題の事件に関与することなしに無事に長官職を勤め上げた場合には、何歳で職場を去らなければならなかったであろうか。

古代ギリシアにおける国家公務員の標準退職年齢が何歳だったかについては、史料が不足しており未詳である。しかし、50歳～60歳くらいだったと考えてよさそうである。プラトンは『国家』篇第7巻において、市民が公務に就きうる年齢の上限を50歳としている⁷⁾。また、『法律』篇第12巻では、役人たちの執務監査をとり行う監査官について年齢制限を設け、「50歳未満ではない者」で「75歳までその官職にとどまる」ものと規定している⁸⁾。ただし、ここでいう監査官は優秀な市民たちのなかから特別に選抜された者であって、一般の役人と同じ扱いはできない。同じ『法律』篇第12巻では、海外視察官など重要な役職者になりうるのは50歳以上で60歳までの者としている⁹⁾。したがって、市民がふつうに公務に従事しえた最長年齢は60歳だったとするのが妥当かもしれない。しかしその普通のケースと、一種の名誉職でもある造幣局長官といった役職者の場合とでは、事情は少しばかり違っていただかもしれない。そして実際プラトンも、先に言及した視察官について、「60歳を過ぎれば、もはや視察官の任務にはつけない」と規定したうえで、さらに、その者が帰国して任期を終えたなら、「法律を監視する人たちの会議に出席するものとする」と言っている。60歳を越えて、なおも何年かは、国家に奉仕しなければならないわけだ。しかしプラトンは、その奉仕が何歳までか、ということまでは説いていない。「75歳まで」云々は国家の最重要会議である「夜明け前」の会議を主宰する「長老」たちについての規定であって、造幣局長官といった役職者につ

いて当てはまるものとは考えにくい。

そこで一応、造幣局長官の退職年齢は60歳から65歳までであったとしてみよう。そしてヒケシオスの生年については、彼が長官職に留まりえた最大限の下限が問題になっているのだから、その推定生年の下限である前424年を採ることにしよう。すると彼は、少なくとも前359年頃には造幣局長官職を辞さなければならなかっただろう。そして、ちょうどこの頃、ディオゲネスは少なくとも45歳にはなっていただろう。したがって、すでに結婚し子供（たち）をもうけていただろう。そして、その一番上の子供がもしも男子であったならば、その子の名前は、たぶん、「ヒケシオス」であっただろう。

こうして問題の通貨変造事件は、もしもそれが実際の出来事であったとすれば、前393年を上限とし前359年を下限とする、34年ほどのタイムスパンの中で起ったと想定するのがいちばん理に適っていることになるだろう。

II 「ヒケシオス」硬貨をめぐるダドリー／セルトマン説

通貨変造事件の年代をめぐるわたしの推測は、近年におけるディオゲネス研究の嚆矢となったD・R・ダドリーの書物の結論とも、またF・セイヤーやL・E・ネイヴィア等のそれらとも喰い違う¹⁰⁾。しかし多くの研究者は、概してダドリーの年代決定を基準としてきた。そこで、当該事件の年代決定に関するダドリーの意見を徴しておこう。

ダドリーは、問題の通貨変造事件が起った後、ディオゲネスが国を出奔してアテナイに到着したのは、どう考えても前340年より前ではありえない、と主張した¹¹⁾。ダドリーのこの主張は、貨幣史研究家セルトマンがシノペの硬貨について行った調査報告に基づいている¹²⁾。その報告の概要を簡単に紹介しておこう。

シノペー通貨変造事件

シノペは前6世紀から立派な貨幣を発行している。が、問題になるのは前4世紀における貨幣発行の状況である。セルトマンはこれを三期に分けて考察する。

第1期：前4世紀の初めから370年まで。この時期に発行された硬貨の表面には河神アソポスの娘シノペの横顔が刻まれ、裏面にはドルフィンの上に乗る海鷲の像が刻まれている。裏面にはまたシノペの国名を表す「ΣΙΝΩ (シーノー)」というギリシア文字ならびに当該貨幣発行者の名前を示す2文字ないしそれ以上の文字が刻まれている。

第2期：前370年から362年まで。この時期のシノペはダスキュリオンのサトラップ（太守）ダタメスの支配下に置かれていた。この時期にシノペで発行された硬貨の表面は第一期と変わらないが、裏面には第1期にあった「ΣΙΝΩ」というギリシア文字がなく、これに代わって「ΔΑΤΑΜΑ (ダタマ)」というギリシア文字が刻まれている。

第3期：前362年から少なくとも前310年まで。この時期の表面のデザインは第1期のものとほとんど変わらないが、シノペの顔の前部に古代ギリシア船の船尾装飾紋様をかたどったデザインがみられる。

さて、セルトマンが注目したのは、『小アジアにおけるギリシア貨幣大集成』に収録されているシノペの前4世紀第3期発行硬貨のうち9枚の裏面に、通貨発行責任者の名前として「ΙΚΕΣΙΟ (ヒケシオ)」というギリシア文字が刻まれている事実であった。すなわち彼は、前362年以降のある時期に、ディオゲネスの父親ヒケシオスと同名の人物が実際にシノペの造幣局長官に就任していた事実に着目した。そして、この人物がディオゲネ

スの父親ヒケシオスその人であると仮定して、通貨変造（パラハラクシス παραχάραξις）事件との関わりについて次のような推論を行なった。

ヒケシオスは何故、通貨を変造しなかったのか。前4世紀のシノペには多くの外国製偽造硬貨が出まわっていた。セルトマンが証拠として挙げたのは、シノペが発行したものとそっくりではあるがアラム文字¹³⁾で「ARIAWRATH」という刻銘をもつ37枚の硬貨、同じく「ABDSSN」という刻銘をもつ18枚の硬貨、合わせて55枚の硬貨であった。これらのうち「ARIAWRATH」という刻銘は、明らかに、前351年～333年の間カッパドキアの太守であった「ARIARATHES（アリアラテス）」のもので、この刻銘をもつ硬貨はシノペで発行されたものではありえない。他方で、ギリシア文字に似せた刻銘をもつシノペ・タイプの外国製偽造硬貨40枚が見つかっている。これらの事実に基づいて、セルトマンは、問題の「通貨変造」事件について次のように述べた。

前350年以降15間というもの、シノペは、自国の通貨の偽物、とりわけカッパドキアの太守が発行した大量の贋造通貨によって著しく信用を傷つけられていた。これに対処するために採られた措置こそが「ディオゲネス伝」20.1においてヒケシオスに帰せられている「通貨を変造したので」（παραχάραξαντος τὸ νόμισμα）と言われている行為である。セルトマンが証拠として示したのは、アラム文字の刻銘をもつ55枚の硬貨のうち31枚（約60パーセント）、外国製偽造硬貨40枚のうち8枚（20パーセント）である。それらは大きな鑿のようなもので表面を傷つけられている。これがすなわち前4世紀における「パラハラクシス」（παραχάραξις）の真の意味である、とセルトマンは主張する。「パラハラクシス」（παραχάραξις）は「偽造」とか「贋造」を意味しえない。「贋金を造る」に相当するのは「パラコプテイン」（παρακόπτειν）であって「パラハラクシス」ではない。さらに言えば、シノペではベースとなる銅とか鉛などの金属のうえに鍍金

シノペー通貨変造事件

を施した贋造硬貨はまったくみつかっていない、と彼は主張する。

ところで、こうした「パラハラクシス」の措置は、造幣局の高官以外には指令しえないことである。しかもそれが、まさにディオゲネスの父ヒケシオスがやったとされている行為だ。するとヒケシオスがしたことはシノペの国益に資する立派なことであって、誉められこそすれ罪に問われる謂れはないとも考えられるだろう。では、何故、ヒケシオスは投獄されねばならなかったのか。これについてセルトマンは2つのことを示唆している。前370年～362年間のダタメスによるシノペ支配の後、シノペにはペルシア帝国を後ろ盾とする勢力が入りこんでいた。それらの連中は、当然、カッパドキアの太守が発行した通貨を傷つけた責任者の非を鳴らしただろう。そしてそのことは、国内に騒動を引き起こす元になっただろう。さらに、問題の「パラハラクシス」は、偽造硬貨に対してだけではなく、たぶんは下級役人の不注意によるものと思われるが、まれにノーマルな硬貨に対しても行われた。実際、第一期発行硬貨43枚のうち2枚、第3期発行硬貨130枚のうち10枚が、外国製のものでも贋造でもないにもかかわらず傷つけられている。この事実、造幣局長官を告発するに足る十分な証拠として援用されえたであろう。こういうわけで、とセルトマンは主張する、ディオゲネスの父ヒケシオスは投獄され、父親の仕事を手伝っていたディオゲネス自身は追放刑に会ったのであろう、と。

Ⅲ 「ヒケシオス」硬貨

ダドリーは、先に述べたとおり、セルトマンのこの報告に基づいて、ディオゲネスが国を出奔してアテナイに到着したのは前340年以降でしかありえない、と主張した。しかしこの主張は支持しがたい。

第1に、わたしたちの推測に誤りがなければ、前340年にはヒケシオスは84歳の老齢に達し、とおの昔に長官職を辞してしまっているものでなけれ

ばならない。いや、ひょっとすると、すでにこの世の人ではなかったかもしれない。そのヒケシオスが、どうして通貨変造事件に関与しうるのであろうか。

第2に、その年、すなわち前340年には、ディオゲネス自身も64歳ないしは73歳になっていたはずだ。そしてこれは、或る人の「この世で惨めなものは何か」という問いに答えて「困窮している老人だ」とディオゲネスが言った（DL 6.51.2）、そのときに彼自身がイメージした惨めな老境の年齢だとも言える。

第3に、セルトマンが注目した「ヒケシオス」の刻銘をもつシノベの硬貨の発行年代は、今日では、いずれも前330年頃を遡るものでない、と鑑定されている。この鑑定がもし正しければ、その事実実はダドリーの主張を決定的に反駁するものである。次のサンプルを見ていただきたい¹⁴⁾。



これら3枚の硬貨はいずれも、セルトマンの報告にある前4世紀シノベにおける第3期発行通貨の特徴をよく表している。表面には河神の娘シノベの横顔が刻印され、その前部（左）に古代ギリシア船の船尾装飾文様¹⁵⁾を象ったデザインが見られる。裏面にはドルフィンの上に乗る海鷲が刻まれている。そしてドルフィンの下にはシノベの国名を示す「ΣΙΝΩ（シーノー）」というギリシア文字が刻まれ、鷲の胴部と広げられた翼の間の隙間に当該貨幣発行責任者を示す「ΙΚΕΣΙ [Ο]」（ヒケシオス）の5文字が刻まれている。ちなみに左端の硬貨はセルトマンが参考にした『小アジアにおけるギリシア貨幣大集成』に収録されているもののうちの一枚である。しかし、奇妙なことがある。「ΙΚΕΣΙ [Ο]」（ヒケシオス）という刻銘をも

シノペー通貨変造事件

つ硬貨にはいまひとつ別の種類のものがあるのだ。次の硬貨をよく見ていただきたい。



これら3枚の硬貨の表面には第3期シノペ硬貨の特徴を示す船尾装飾文様が刻印されていない¹⁶⁾。この点で、もしもこれらの硬貨が第3期発行硬貨であるとすれば変則的である。これらは、前330年～300年発行と鑑定されているにもかかわらず、実際には第1期ないし第2期に発行されたものかもしれない。すると、これらの硬貨における「IKEΣIO」という刻銘はディオゲネスの父親ヒケシオスを指すものではないのか。

想像を逞しくすれば、次のような推論が成り立つかもしれない。H1, H2, H3の硬貨は、前330年頃、シノペに、ヒケシオスという名前の造幣局局長官がいたという事実を証明している。その事実は、当の人物の祖父の名前がヒケシオスであったことを推測させる。古代から現在にまでいたるギリシアの慣習によれば、孫は祖父ないし祖母の名前をもらうのが普通だからである。そして、その同じ事実は、当の人物の父親が銀行家であったことをも推測させる。実業の世界では、当時の慣習として、父親の家業を息子が受け継いでいくのが普通だったからだ。さらに、「ヒケシオス」という言葉は、ゼウス神やアポロンのエピセツ（「ゼウス・ヒケシオス」（嘆願者のゼウス）、「アポロン・ヒケシオス」（嘆願者のアポロン））として周知のものであったが、人名としてはどちらかというとき珍しいものである。これらの事実は、問題の硬貨の発行者がディオゲネスの長男であったかもしれない可能性を示唆している。しかもそのことは年代学的にみても蓋然性が高い。父親ヒケシオスの退職年齢下限であるとされた前359年に

ディオゲネスは45歳くらいだったはずだが、彼にもし長男がいたとすれば、その子は、同じ年に20歳から25歳くらいになっていたはずである。したがってその子は、前330年には、49歳～54歳くらいにはなっていただろう。これは、貨幣発行責任者となっても少しもおかしくない年齢である。それゆえ、もしも下段2枚の硬貨が第1期ないし第2期に発行されたものだったとすれば、これらの硬貨に刻まれている「ΙΚΕΣΙΟ」という文字は、まさにディオゲネスの父親ヒケシオスを指すものである、と。あまりにも大胆にすぎる推測だと評されるかもしれない。が、この可能性を否定するに足る積極的な証拠はない。

ところで、いまひとつ注目すべき事実がある。それは、上に掲げたすべての硬貨の細部の図柄が、仔細に見れば、それぞれに異なっているという事実である。これらの硬貨の細部はどれひとつとして同じではない。ということは、これらの硬貨は、同じ時期に同一の型から打ち出されたものではなく、図柄の細部を少しずつ変えながら何年かにわたって持続的に発行されたものだということになる。たぶんは偽造防止のためでもあったろうか。

鑑定なるものは絶対的ではない。誤りうる。そしてわたしが上に指摘した事実も、ひょっとしたら、そういった誤りの一つであったかもしれない。が、とにかく、パフラゴニアないしシノペで発見された貨幣のうち「ΙΚΕΣΙΟ」という刻印をもつすべての硬貨が、今日、例外なく、だいたい前330年～前300年の期間にシノペで発行されたものと鑑定されていること自体に変わりはない。この事実は、一応、尊重されなければならない。そこで、この鑑定がもしも仮に正しいとするなら、これらの硬貨がディオゲネスの父ヒケシオスによって発行されたものではないことは明らかである。何故なら、前330年には、ディオゲネスの父ヒケシオスは少なくとも94歳、そして前300年には124歳くらいになっていなければならないからだ。94歳はともかく、124歳はまったく不可能な年齢である。したがって、これら

シノペー通貨変造事件

の硬貨の発行責任者であるヒケシオスを、セルトマンやダドリーのよう
に、「ディオゲネス伝」のヒケシオスと見ることは不可能である。さらに言え
ば、ディオゲネスが関与したとされる通貨変造事件を前330年～前300年の
期間に想定すること自体が、全くのナンセンスとなる。何故なら、ディオ
ゲネスは前323年にこの世を去っていなければならないからだ。

この結論は、たんにダドリーの主張を反証するのみならず、そもそもヒ
ケシオスとディオゲネスに帰せられてきた問題の通貨変造事件そのものが
単なる「作り話」にすぎなかったのではあるまいかという、当然とも思え
る疑惑へと人を導くことになるだろう。ところが、ダドリーがセルトマン
の報告に依拠することによって否定しようとしたのは、シュヴァルツおよ
びフォン・フリッツによって唱えられたところの、まさにこの「通貨変造
事件作り話」説だったのである。

ヒケシオスとディオゲネスの親子が関わったとされている「通貨変造事
件」なるものは、シュヴァルツおよびフォン・フリッツによれば、ディオ
ゲネスがつねづね自らの使命として唱道していたところの「パラハラクソ
ン・ト・ノミスマ」(παράχαραξον τὸ νόμισμα 世間で法や習俗として通用
しているものを造り変えよ)を核としてでっちあげられた虚構にすぎない。
「ヒケシオス」なる銀行家も、フォン・フリッツによれば架空の人物であ
る。しかもその架空の人物をつくりあげた手口すらみえすいている。その
手口は、プラトンが『テアイテトス』篇において「助産婦」ファイナレテ
を創作してみせたのと同じものである。『テアイテトス』篇に登場するソ
クラテスは、自分の仕事を「助産」のそれになぞらえたが、その技術を彼
は「助産婦」であった母親ファイナレテゆずりのものだと言わなかっただ
ろうか(149A－150B)。同様に、問題の通貨変造事件をでっちあげた人
物も、ディオゲネスの仕事を父親ゆずりのものとみせかけようと目論んで、
ディオゲネスの父親であると同時にシノペの貨幣発行責任者でもある「ヒ

ケシオス」なる人物をでっち上げたというわけだ¹⁷⁾。

ところで、ダドリーがセルトマンの報告を欣喜雀躍して援用した理由は他にもある。通貨変造事件が起ったのは前350年以降だとするセルトマンの説が正しいなら、21.2が報告しているようなアンティステネスとディオゲネスとの間の師弟関係もまた虚構にすぎないとして却下することができるからだ。

ダドリーの主張によれば、ディオゲネスがアテナイに到着したのは前340年以降のことではなければならない。ところが、前340年頃にはアンティステネスはすでに物故していたはずである。彼は前366年を去ること遠くからずして死んだものと考えられるからだ¹⁸⁾。すると、ストア学派の人々によって創作されたと思われる「ソクラテス—アンティステネス—ディオゲネス—クラテス—ストアのゼノン」という学説史的系譜は虚構にすぎないと断定してよいことになる。何故なら、アンティステネスとディオゲネスがもしも相会う可能性がなかったとすれば、ソクラテスをストア学派の祖ゼノンに繋ぐ鎖の環は断ち切られてしまうからだ。すなわち、アンティステネスが前366年頃に死に、ディオゲネスがアテナイに到着したのは前340年以降であったとすれば、二人が師弟でありえたはずはないことになる。

つまりダドリーは、セルトマンの報告の信憑性にかけて2面作戦を取ったわけだ。ところが、その信憑性が疑われる事態が出来た。したがって解決すべき問題はこうなる。つまりその事態がわたしたちを、一方では例の通貨変造事件をまったくの虚構と解させる方向へと逆戻りさせることになるかどうかであり、他方では同じその事態が、アンティステネスとディオゲネスとの間の師弟関係をありえたことではないかと想定し直させることになるかどうかである。

IV 通貨変造事件は虚構か

まず、最初の問題から始めよう。わたしたちの推定によれば、「ΙΚΕΣΙΟ」の刻印をもつシノペの硬貨のうち表面に第三期シノペ硬貨の特徴を示す装飾船尾が刻まれている貨幣は、ディオゲネスの父親ヒケシオスが発行したものではありえなかった。では、その事態は、ヒケシオスないしディオゲネスに帰されている問題の通貨変造事件が虚構であったと断定する根拠たりえるであろうか。

いや、それが必然的に含意するのは、「ΙΚΕΣΙΟ」という刻印をもつ問題の硬貨の発行責任者がディオゲネスの父親ヒケシオスと同一人物ではありえない、ということだけである。それは、ヒケシオスという名前をもつひとりの造幣局長官が前330年から300年頃にシノペにいたという事実自体を覆すものではない。そしていま一つ、ディオゲネスの父親ヒケシオスが長官職を退かなければならなかった時期の下限とされた前359年頃を中心として、「パラハラクシス」の痕跡を残す沢山のシノペの硬貨が見つかったこと自体も、やはり厳然たる事実として残る。

これらの事実を解釈するうえで、わたしが改めて注目したいのは逸話20.3である。そこでは、

「のみならず、彼〔ディオゲネス〕自身もまた、『ポルダロス』という書物のなかで、自分自身について語りながら、自分が通貨（ノミスマ νόμισμα）を変造したのだ（パラハラクサイ・ト・ノミスマ παραχάραξαι τὸ νόμισμα）と主張している。」

と報告されている。ディオゲネスの著書『ポルダロス』は現存しないが、それが彼自身の著書であったこと自体は一般に疑われていない。上の引用

文中の「通貨を変造した」という表現はディオゲネスが自分の使命感にひきつけての比喩的発言を意味するのではあるまいか、という解釈が成り立たないではない。が、無理であろう。むしろ20.3は、逸話49.1に関連づけるのが最も自然である。すなわちそこでは、

「ある人が、彼〔ディオゲネス〕が追放になったことについて非難したとき、その人に向かって、『そのことがあったればこそ、哀れな奴め、わしは哲学することになったのだ』と言い返した。」

とある。この場合の「追放」という言葉は、比喩的には解釈しえない。むしろそれは、まぎれもなしに現実に行ったスキャンダラスな何かの事件を指している。56.4ならびに56.5の主旨についても同じことが言える。とりわけ56.4は、「通貨を変造したことについて」(ἐπὶ τῷ παραχαράξαι τὸ νόμισμα) 或る人がディオゲネスを非難したことに対する応答となっている。比喩的解釈が入りこみうる余地はない。

したがって、何かの事件があってディオゲネスが国を追われたこと自体は疑えない。そして、その事件としては「パラハラクシス」ないしそれに関連する重大な何かの事件以外には考えられない。その「パラハラクシス」ないしそれに関連する何事かのゆえにこそ、その或る人はディオゲネスを非難したのだから。したがってディオゲネスの父親ヒケシオスがそれに実質的に関与しえたかどうかはともかく、問題の通貨変造事件なるものは虚構ではなく、一つの具体的な出来事であったと考えるべきである。

ここで想起科したいのは通貨変造事件をめぐる5つの逸話、20.1、20.2、20.3、20.4、21.1の含意する事柄が、それぞれ微妙に食い違っていたことである。改めて注目してみたいのは、これらの逸話のうちヒケシオスに通貨変造事件への積極的な関与を明確に打ち出しているのが逸話20.1だ

シノペー通貨変造事件

けだという事実である。その他の逸話にあっては、ヒケシオスの役割は消極的であるか曖昧であるかである。逆に、積極的に打ち出されているのは当該事件へのディオゲネスの関わりである。20.2によれば、ディオゲネス自身が通貨を変造している。20.3によれば、ディオゲネス自身が、通貨を変造したのは自分自身だ、と言明している。20.4によれば、通貨変造に手を下したのは「職人たちを監督する立場にあった」ディオゲネス自身であった。最後に、21.1によれば、ヒケシオスから預かっていた通貨をディオゲネス自身が変造している。

こうして見ると、「パラハラクシス」の主演はあくまでもディオゲネスその人なのである。この事実は何を意味するのか。わたしたちはこれまで、ヒケシオスとディオゲネスの当該事件への共同関与を前提にして、「ヒケシオス」という刻印をもつ硬貨がもつ考古学的重要性のゆえに、また、当該事件が起ったタイム・スパンを見定めるべく、造幣局長官ヒケシオスを焦点にした推論を進めてきた。しかしまさにその考古学的証拠こそが、問題の通貨変造事件は虚構だったのではあるまいかという疑惑を呼び起こすことになったのである。にもかかわらず、何かの事件があってディオゲネスが国を捨てて亡命したという事実自体は動かない。そして当該の事件は、「パラハラクシス」ないしそれに関連する重大な何事か以外ではありえなかったのである。

ここで、5つの逸話を改めて読み直すことにしよう。すると、最初に問題になるのは逸話20.4に現れる「監督者」という言葉である。この「監督者」(ἐπιμελητής)という言葉については、先にも解釈の余地があることが指摘されていた。この言葉は、ディオゲネス自身がそのとき造幣局全体を監督する立場、すなわち長官職にあったのではないかという推論を許すからだ。しかし、先には、ヒケシオスとディオゲネスが同時に造幣局長官であることは不可能だから、ヒケシオスに焦点を合わせるかぎり、この逸

話が意味するのは次のこと、すなわちディオゲネスは硬貨を実際に造る工場の監督として、ヒケシオスは造幣局全体を管掌する長官として、それぞれに責任を問われる羽目になったのだと解釈された。

しかし、その解釈は一つの可能性にすぎない。まず、次の事実に注目しよう。通貨変造事件にかかわる逸話のうち20.1, 20.2, 21.1は、ヒケシオス一身上の顛末に関する記述において互いに完全に食い違っている。20.1は、事件後ヒケシオスがどうなったのかについて何も語らない。20.2は、彼がディオゲネスと一緒に亡命したと言う。そして21.1は、彼が獄に繋がれて死んだと言う。他方でこれらの逸話のうち、ヒケシオスの通貨変造事件への積極的関与を認めているのは20.1だけである。しかしこの逸話は、ヒケシオスの爾後の運命については口を緘している。語られているのは奇妙なことにディオゲネスの「追放」だけである。つまりこの逸話にあっては、「原因」と「結果」の間に想定されなければならない必然性が欠落している。

ヒケシオスに焦点を求めるかぎり、逸話20.1, 20.2, 21.1は情報源として頼むに足らないということである。他方、逸話20.4は、ヒケシオスには一切言及することなく「監督者」(ἐπιμελητής) ディオゲネスについてだけ語っている。この「監督者」を、改めて、「造幣局全体を監督する長官職」を意味するものと読んでみよう。そう読んで、何か不都合なことが生ずるであろうか。否、そう読むことによってはじめて、20.4は筋の通ったものになるだろう。

逸話20.4が告げる状況は、以前には次のように解釈された。すなわちディオゲネスは、造幣局長官である父親ヒケシオスの下で硬貨の加工を専門とする工場の監督として働いていたときに、職人たちの勧めやアポロンの神託その他のことがあって自ら硬貨を変造するに至ったのである、と。しかし、この解釈には無理がある。何故なら、もしもそうだったとすると、

ディオゲネスは、上司に当たるヒケシオスに相談することなく、勝手に事を進めたことになるからだ。また、「職人たちによって説得されて」と言われているが、これも奇妙である。もしもこのときヒケシオスが長官であったならば、彼ら職人たちが第一に説得すべきは、一番の上司であるヒケシオスでなければならなかったはずだからだ。というのも彼ら職人を束ねる最高責任者はヒケシオスであって、彼は職人たちを自分の裁量で解雇することもできたからである。したがって最も自然なのは、このときヒケシオスはもはや長官ではなく、彼に代わってディオゲネスがその地位を受け継いでいた、と解釈することである。そのような地位にあったからこそ、ディオゲネスは国家を揺るがすことになるかもしれない最終決断をしなければならなかったのである。

この解釈は、逸話21.1が言っていることと考え併せるなら、いっそう確からしいものとなるだろう。というのも、21.1では「彼は父親から引き取った貨幣に損傷を加えた」(παρὰ τοῦ πατρὸς αὐτὸν λαβόντα το νόμισμα διαφθεῖραι)と言われているが、これが意味しているのは長官職の交代と業務の継承という事態だと思われるからである。すなわち、この解釈によればディオゲネスは、父親が長官職を勤めていたときに保管していたある種の硬貨を、自分が長官となるに際し引き取って(λαμβάντα)、これらに損傷を加えた(διαφθεῖραι)ことになるだろう。そしてこれが発覚したとき、父親ヒケシオスのほうはすでに造幣局長官ではなかったものの、それらの硬貨を息子に託した罪を問われて獄に繋がれて死んだ。が、ディオゲネスのほうは「追放」の憂き目に遭ったか、それとも後難を恐れて亡命した(φυγεῖν)、ということになるであろう。

もしもこの解釈が正しいとすれば、ヒケシオスが長官職を勤めえたタイム・スパンの下限に当たる前359年以降も、何故「パラハラクシス」の痕跡を留める多数の硬貨が発見されるのか、その理由が分ろうというものだ。

それらは、父親がやりかけた仕事を完遂しようとしたディオゲネスの仕業なのである。つまりディオゲネスは、父親ヒケシオスから引き取った硬貨をパラハラッテインしただけではなく、ある種の硬貨を変造して発行し、これをもパラハラッテインしたにちがいないということになる。

ヒケシオスから継承されたその仕事は、当然、それが発覚するまでシノペの造幣局内において隠密に進められた。では、それはいつ露見したか。また、そのことによって、いつディオゲネスは追放されるにいたったのか。あるいは、いつ、自らすすんで亡命することになったのか。この問題に決着をつけるに足る絶対に確実な証拠は存在しない。が、ディオゲネスは、前350年を少し下った頃、すなわち前349年か少なくとも348年の初め頃までには、シノペを後にしてアテナイへと向かったにちがいない。

この想定には根拠がある。『弁論術』第3巻第10章（1411A）においてアリストテレスが、「『犬』はタベルナ（飲食店）を『アッティカのフィディティア（共同食事）』と呼んだ」と証言しているからだ。この「犬」（*ῶ κύων*）という渾名がディオゲネスを指す蔑称であることには、まず間違いがない。ディオゲネスは、アリストテレスが『弁論術』第3巻第10章を執筆していた頃には、すでにアテナイに定住していて、「犬」と言えば誰も知らない者がいないほどまでに有名な人物になっていたのである。

問題は、『弁論術』がいつ執筆されたかである。これについては大きく分けて2説がある¹⁹⁾。アリストテレスが2回目にアテナイに滞在していた前335/4年～323/2年の期間に書かれたという説と、彼がまだプラトンのアカデメイアに留まっていた時期、その最後に近い頃に書かれたという説がそれである。種々の考証に基づいて検討してみるに、真実に近いのは後者であろうと思われる。だとすればディオゲネスは、すでに前347年には、アテナイに定住していたに違いない。アリストテレスがアテナイを去ったのは、プラトンが前347年に80歳で没した直後のことだと一般に考えられ

シノペー通貨変造事件

ているからである。

すなわちディオゲネスは、プラトンが没する前、そしてアリストテレスが『弁論術』第3巻第10章第1次草稿を書き上げる前に、アテナイに到着していたことになる。そのとき彼はすでに、少なくとも56歳くらいにはなっていただろう。

この年代設定は、逸話20.4および21.1に関してわたしが提出した解釈によく合致する。その解釈によればディオゲネスは、父親が長官職を勤めていたときに保管していたある種の硬貨を、自分が長官となるに際し引き取ってバラハラッテインしただけではなく、粗悪な硬貨を発行し、これをもバラハラッテインして世間に流通させたのであった。すると、この、父親ヒケシオスからの長官職の継承と粗悪な硬貨の継続的発行は、たぶん前362年頃から348年頃までの間に起ったことであるにちがいない。

V ダタメス硬貨の謎

それは、交易国家として黒海世界にその名を馳せたシノペにとって、未曾有の危機の時代であった。逸話49.2においてディオゲネスは、ある人が「シノペの人たちがおまえに追放を宣告したんだったね」と言ったのに対して、「だが、わしは、あいつらに、おまえたちは国に恋々としがみついておればよいと宣言してやったのだ」と言っているが、気概あるシノペの市民たるや耐えがたいと思うのが当然だと思われる屈辱的な事態が、そのころシノペでは起っていたのである。すなわち、ペルシアの属州カッパドキアの太守ダタメスと後継者たちがパフラゴニア地方に侵出し、シノペを支配下に置いたのである。ディオゲネスが国を捨てたとき、シノペの市民たちはすでにペルシア帝国による間接統治支配の下にあった。この事態を十分に理解することなしには、ヒケシオスとディオゲネスが関与したとされる「通貨変造」事件の真相は明らかにならないであろう。

ダタメスと彼の後継者たちによるシノペの間接統治支配と言ったが、その実態はかなり複雑である。通貨変造事件との関連性を見逃さないように注意しながら、その詳細をしばらく追及してみよう。

ネポスの『英雄伝』²⁰⁾によると、ダタメスは元々ペルシア王アルタクセルクセス2世の王宮を守る護衛官であったが、ペルシア王の命に従わないパフラゴニアの太守テュオスを生け捕りにしたり、カッパドキアの隣国カタオニアを支配していたアスピスを逮捕するなど数々の戦功を立てて拔擢され、第2次エジプト遠征軍の最高指揮官に任命されるまでになった。ところが彼の異例なまでの躍進は、同僚たちの妬みとペルシア王への激しい讒訴を産んだ。前384年頃、ダタメスはすでにカッパドキアとキリキアの太守となっていたが、彼の破滅を画策するペルシア王の廷臣たちの謀略を時の財務監督官で友人のパンダンテスの手紙によって知ると、ダタメスはいよいよ「王から離反する決意」を固めた。そして「マグネシアのマンドロクレスにエジプト遠征の指揮権を譲ると、みずからカッパドキアへ退き、王に対する胸のうちのをひた隠しにしつつ隣接するパフラゴニアを占拠した。」

こうして彼はシノペの背後に迫った。ネポスの『英雄伝』は、ダタメスによるシノペ支配については何も語っていない。したがって、その詳細を知ることはできない。しかしポリュアイノスの『戦術書』第7巻21章の2は²¹⁾、シノペ攻略に際してダタメスが採ったたいへん悪辣で抜け目のないやり方を次のように伝えている。

「ダタメスは、海軍力を誇るシノペの市民に、次のような陰謀を仕掛けた。ダタメスの許には造船技師も大工もいなかった。そこで彼はシノペの市民と友好条約を結び、『自分は好戦的だとの噂がたえぬセサモスの町を攻囲するつもりでおり、この町を陥落させた暁には皆さんに譲る所存だ』と約束した。シノペの市民は彼を信じ、戦で必要なも

シノペー通貨変造事件

のがあるならなんなりと自分たちのもつから調達するように伝えた。ダタメスは、『自分には潤沢な軍資金があり、また兵士の数も揃っているが、包囲作戦には欠くことのできぬ戦闘兵器、破壊槌、それに差し掛け屋根などを作る者がいないので、それらを作る職人たちをお借りしたい』と言った。シノペの市民は、町にいる大工と設計技師を全員ダタメスの許に遣わした。職人たちを働かせて、多数の軍艦と戦闘兵器を作ったあと、彼はセサモスではなくシノペを包囲するためにそれを用いた。』²²⁾

ダタメスはシノペの町を海上から攻撃したようだ。というのも、シノペ包囲中にダタメスはアルタクセルクセス2世から「包囲を禁止せよ」との手紙を受け取ったが、そのとき彼は「手紙に恭しくお辞儀をすると、王から過分な褒美を得たかのように、吉報に対する感謝の犠牲を捧げた。それから夜のうちに船に乗り、シノペを離れた」と言われているからである²³⁾。

ポリュアイノスの伝えるこの話は二つの事実を含意している。一つは、コテュオラにシノペが派遣した使節団代表ヘカトニュモスの発言にあったように、シノペの地勢が陸上からは攻めるに難い天然の要害となっていて、ダタメスもまた海上からの攻略を余儀なくされたという事実。いま一つは、アルタクセルクセス2世がダタメスのシノペ攻略を喜んでいなかったという事実である。ポリュアイノスによると、アルタクセルクセスという人物はかなりに陰険な人物で、つねに敗者に加勢したらしいが、それは彼が「敗者に勝者と同等の力を持たすことにより、勝者の力を削ごうとした」からだ、と言われている²⁴⁾。つまり彼はこの場合も、ダタメスの力が自分を凌ぐほど強大なものになることを恐れて「包囲禁止」を命じたのではないかと考えられる。

これに対しダタメスが衆人看視のなかでアルタクセルクセスの手紙に恭

しくお辞儀をしてみせたのは、その時点で王に対する反逆心を露わにするのは得策でないと考えたからであろう。

もちろんしかし、これはダタメスの本心ではなかったわけで、着々と勢力を蓄え、王に対抗する強力な拠点とすべく、やがてシノペを支配下に置いたであろう。前369年から364年頃のことかと思われる。この頃に、「ΔΑΤΑΜΑ」(ダタマ)というギリシア文字の刻銘をもつドラクマ硬貨がシノペ周辺に出回り始める。次のサンプルを見ていただきたい。



D1のスタテル硬貨は、前369/8～361/0年に発行されたものと鑑定されている。が、361/0年はあるにないだろう。その年にはダタメスは暗殺されてすでにこの世にいなかったからだ。

この硬貨はダタメスがバフラゴニア地方に侵出する以前のもの、ないしは、シノペがその一部であるバフラゴニア地方ではなく、彼の本拠地であったカッパドキア地方を中心に出回ったものであろう。表面にも裏面にもシノペとの関わりを示すものは何も認められない。

この硬貨の表裏の図柄は精緻である。硬貨表面には、上半身裸体の髭を生やした神が、右手に王錫を持ち、左手に麦穂と葡萄の房を持って正面を向いて座っている。その左にはこの神の名を示す「Baaltars」と読めるアラム文字が縦長に刻まれている。そしてこれらの図柄全体を銃眼で縁取りされた胸壁が丸く取り囲んでいる。硬貨裏面の図柄は点で囲んで仕切った方形の縁取りのなかに納まっているが、真ん中に香炉があり、これを挟んで向かい合う二人の立像が刻まれている。向かって左側は裸形のアナ神で、右手を伸ばし向かい側に立つダタメスを指している。右側にはヒマティオ

ンを着したダタメスが、右手を挙げ、手首をわずかばかり自分の方に曲げて立っている。香炉と右側の人物の間には「Datames」と読めるアラム文字が縦長に刻まれている。このタイプのダタメス硬貨は、カッパドキア地方を中心に沢山見つかっている。

これに比べると D2, D3 のドラクメ硬貨はまったく様相を異にしている。D2 硬貨の表裏面の図柄は一見して前 4 世紀シノペの第 1 期ドラクメ硬貨とそっくりである。が、裏面にはノーマルなシノペの硬貨には必ずあるはずの「ΣΙΝΩ」という文字がない。代わって「ATA」というギリシア文字が見える。この硬貨原版の彫りの技術自体は決して悪くない。それはたぶんシノペの造幣局から出た原版を使って打刻されたものであろう。が、表裏の打ち合わせはかなりずれている。打刻に当たった職人の技術の拙劣さに帰せられるべきものである。D3 硬貨の図柄はまだしもであるが、この硬貨の裏面海鷲の頭部の部分には後から加えられた打刻印の跡が見られる。その打刻が表面シノペの頭部に及び、シノペの頭頂は潰され崩れてしまっている。これら 2 枚の硬貨にも「ΣΙΝΩ」の文字はない。

「ΔΤΑΜΑ」の刻印をもつ D2, D3 硬貨は、いずれも前 375 年から 350 年に発行されたものとされている。しかし、実際には前 350 年はいりえない。その年にはダタメスはすでに死んでしまっている。では、前 375 年のほうはどうか。その年にはダタメスは未だシノペを支配下に置いていない。

それとも、前 375 年頃からすでに、シノペのものを模した硬貨が発行されなければならなかった何らかの理由があったのであろうか。また、それらの硬貨には何故アラム文字ではなくギリシア文字が刻印されているのか。何故カッパドキアの太守の名前がギリシア文字で「ΔΤΑΜΑ」と刻まれなければならなかったのか。何故、一方ではシノペの硬貨のデザインを採用しながら、他方ではノーマルなシノペの硬貨にはある「ΣΙΝΩ」の文字の方は抹消されなければならなかったのか。これらの硬貨は、いつ、誰が、

何処で、何を意図して造ったものなのか。

この謎に迫るための恰好の手がかりが、ポリュアイノスの『戦術書』第7巻21章の1にある。少し長いが引用しておこう。

「兵隊たちが数か月分の給料を支払うよう要求したとき、ダタメスは集会を開き、『ここから3日ほど進んだ地点にたくさんの金を用意してあるゆえ、その地点まで大急ぎで行こうではないか』と言った。兵隊たちはその言葉を信じ、彼について行った。3日ほどの距離を進んだときだ。ダタメスは、兵隊たちに休息を命令する一方、自身はラクダとラバを連れ、腹心の部下とともに近くの神殿に出かけて行った。その神殿には近在の者たちから寄進された宝物が保管されていたが、彼はそこから3タラントンの銀粒を奪うと、それをラクダとラバに積んで野営地にもどった。ダタメスは持ち帰った銀粒を数個の壺に詰めたあと、それらの壺とよく似た壺をたくさん用意させた。兵隊たちに銀粒の詰まった壺をいくつか見せてやると、彼らは、金が手に入ったものと思い、喜びに湧きかえっていたが、ダタメスは、『しかし私たちはアミソスに行って、これを貨幣に鑄造しなければならない』と言いつ出した。そのアミソスとは何日もの旅をしなくてはならぬ遠隔の地で、冬荒れの激しい土地柄であったので、兵隊たちは一冬のあいだというもの、給料の支払いを要求して騒ぎ立てることを控えた。』^[25]

ポリュアイノスによるこの報告が、いつの時点におけるものであるかは、分っていない。しかし、それがダタメスによるシノベ制圧以前のことだっただろうことは、かなりに確実である。「アミソス」への言及があるからだ。アミソスは、現在のサムスンである。サムスンからボステペ半島の突先の付け根のところに位置するシノベまで行くには車でも3、4時間を要

シノペー通貨変造事件

する。そのサムスン、すなわちアミソスに行って、3タラント²⁶⁾の銀粒を「貨幣に鑄造しなければならない」、とダタメスは言ったのである。

現在でこそサムスンは大きな工業都市になっているが、古代にあってはシノペよりはるかに小さな町であった。そもそもアミソスは、コテユオラと同様にシノペに定住したミレトス人たちがつくった植民地であった。そのアミソスを、この当時ダタメスはすでに制圧しており、そこに貨幣を造る施設をもっていたらしいのである。彼がもし実際にはアミソスにそのような施設をもっていないのに「アミソスに行って、これを貨幣に鑄造しなければならない」と言ったとすれば、その虚言は、つねに軍事行動を共にしてきた部下たちによって、直ちに見抜かれてしまったであろう。他方、彼がもしこの当時すでにシノペを征服していたならば、彼はそこに造幣局を持っていたはずで、アミソスへ行く必要はなかつただろう。彼の本拠地カッパドキアからは、シノペの方がアミソスよりも近かつたからだ。また、文化レベルや各職種の技術レベルにしても、シノペはアミソスをはるかに凌駕していたから、貨幣を鑄造するならシノペへ行くほうがずっとよかつたであろう。したがって、この当時、ダタメスは未だシノペを手に入れているとはいかなかったと考えると差し支えあるまい。

わたしは、ポリュアイノスの報告が伝えるところの、兵士たちへの給料支払いの要求にただちにこたえられないダタメスのこの窮迫ぶりと、「[アミソスは] 冬荒れの激しい土地柄であつたので、兵隊たちは一冬のあいだというもの、給料の支払いを要求して騒ぎ立てることを控えた」という文言があることから推察して、この時点でのダタメスの状況を、ネボス『英雄伝』XIV 巻の5における

「王から離反する決意を固め……マグネシアのマンドロクレスにエジプト遠征軍の指揮権を譲ると、みずから部下とともにカッパドキアへ

退き、王に対する胸のうちをひた隠しにしつつ隣接するパフラゴニアを占拠した。またひそかにアリオバルザネスと友好条約を結ぶと軍隊を召集し、防備を固めた都市を同盟者の保護下に置いた。しかし冬の季節であったため、準備は思うように進捗しなかった。ピシディア人が自分を討つ軍勢を整えているとの報に、息子のアルシダエウスを軍隊につけ急派したが、この若者は戦いのなかで命を落とした。ダタメスは息子の死が知れ渡り、士気が挫かれるのをなにより恐れ、心の痛手を押し殺すと、敗北の噂が自軍の兵士に伝わるより早く敵地に赴く腹を決め、少数の部隊を率いて出陣した。」

という状況描写と重ね合わせることができるのではないかと考えている²⁷⁾。

わたしのこの推測がもしも正鵠を射ているならば、このときダタメスは、生涯でいちばん切羽詰まった危機的状況にあったとすることができる。実際、この直後に起ったピシディア人相手の戦いのなかで、騎兵隊長を務めていたダタメスの義父ミトロバルザネスは、義理の息子のただならぬ状況に絶望するあまり敵軍に寝返り、長男のシュシナスは父を裏切ってアルタクセルセス王の許へ走っている²⁸⁾。

こうして、ダタメスにとって頼みの綱として残ったのは、ともに戦ってくれる兵士たちだけであった。ところで、これらの兵士たちはというと、当然、アルタクセルセス王の息のかかった者たちではなかった。ダタメスはこのときすでにペルシア王に対して公然と反旗を翻す者となっていたからだ。叛逆者である彼が率いることのできたのは、腹心の部下たちを例外とすれば、『アナバシス』のキュロス王子の場合がそうであったように、金で雇った傭兵たちだけであった。そして傭兵たちかというと、金、褒賞、立身出世などを目当てにダタメスに味方しただけであって、滅私奉公の精

シノペー通貨変造事件

神で臣従していたわけではない。こうしてダタメスの命綱は、兵士たちに支払う給料その他の軍資金だったのだ。しかもその軍資金が、ポリュアイノスの『戦術書』第7巻21章一の記述から窺われるように、底を突きかかっていた。

いったい、その当時、兵士に支払うべき標準的な給料の高はどれくらいであったか。精確なことは分らない。しかしクセノフォンの『アナバシス』の一節は、シノペを発ったクセノフォン一行は、ヘラクレイアまで海路を辿っていったのであるが、そこからさらに陸路と海路を行って黒海の出口に達し、トラキア地方に勢力を張るセウテスという人物と出会い、この男を援けて軍事行動を共にすることになる。そのときセウテスに味方するに際し、クセノフォンは自軍を代表してこの人物と給料支払いをめぐる交渉をした。クセノフォンは次のように言った。

「それでは、もしわれわれがこちらへ来た場合、兵士たち、隊長たち、指揮官たちそれぞれに、どれくらいの給料をお支払いになれるか。ここにいる者たちが帰って一同に報告できるように、それをお聞かせ願いたい。」

これに対するセウテスの答は、「兵士1人当たり（月額）1キュジコス金貨、隊長にはその2倍、指揮官には4倍を支払うこと、それに望むだけの土地、耕作用の幾対かの牛、さらに防壁を施した海辺の砦を一つ与える」というものであった²⁹⁾。

キュジコスはもともと前8世紀にミレトス人がマルマラ海南岸に作った大きな植民国家で、前6世紀から4世紀にかけて立派な貨幣を発行していた。とりわけその金貨は有名であったが、実際にはこれはエレクトロン、金と銀との自然合金であった。その硬貨に占める金の割合は必ずしも一定

していなかったが、平均して約45パーセントであった³⁰⁾。キュジコス硬貨の市場価値は高かった。ただし、クセノフォンの当時、1キュジコス・スタテール金貨の貨幣価値がどれほどのものであったか、11.5ドラクマイだったとする説もあるが³¹⁾、精確には分りかねる。しかし、もしもそれがアッテイカ・スタンダードの1スタテールに相当するものと考えてよいとすれば、セウテスが支払うと言った月給は兵士1人当たり20ドラクマイ、隊長1人当たり40ドラクマイ、指揮官のそれは80ドラクマイ相当のものであっただろう。

クセノフォンはこの条件を持ち帰って兵士たちに相談し、彼らの承諾を得たうえでセウテスの申し出た条件を呑むことにした。しかしクセノフォンは、自分たちの武力を安売りしすぎたきらいがないでもない。ギリシア軍事史研究の権威V・D・ハンセンは、前5世紀における兵士1人当たりの日給を平均1ドラクメと計算しているからだ³²⁾。けれども、このときのクセノフォンたちには弱みもあった。一方ではビュザンティオンの総督アリスタルコスが前途を阻んでいっかな海上通過を許可せず、他方では軍資金が底を突き食糧を入手することさえ困難になっていたからだ。

そこで、一応、ダタメスが兵士1人当たりに支払わなければならなかった日給を1ドラクメと仮定してみよう。そのうえで、彼が兵士たちに総額どれくらいの給料を前払いしなければならなかったかを概算してみよう。「前払い」と言ったが、明日は戦場で命を落とすかもしれない兵士たちにしてみれば、冥土の土産に追銭もらっても仕様がなかろうからだ。

ダタメスはどれほどの軍勢を擁していたのだろうか。ネボス『英雄伝』XIV, 8によると、長男シュシナスの裏切りに会った直後、ダタメスは、ペルシア王が急遽派遣したアウトプロダテスの大軍勢を迎え討っているが、そのときの両軍の陣容についてネボスは次のように記している。アウトプロダテスの率いる軍勢は

シノペー通貨変造事件

「異民族の騎兵2万，歩兵10万（ペルシア人はカルダケスと呼ぶ），同じ民族からなる投石器兵3000，さらにカッパドキア人8000，アルメニア人1万，パフラゴニア人5000，フリュギア人1万，リュディア人5000，アスペンドウス人とピシディア人合わせて3000，キリキア人2000，同数のカプテイニア人，ギリシア人傭兵3000，その他無数の軽装隊，これらの軍勢を敵に回したダタメスは，一縷の望みを自己の勇氣と有利な土地の形状とにつないでいた。ダタメスの兵力は敵の12分の1に満たなかったが，これだけの軍勢を頼りに戦闘に入り，じつに何千何万の敵を倒したのである。」³³⁾

ここで，いま仮に，アウトプロダテス側の総力を20万人であったとすると，ダタメスの兵力はこれの12分の1弱ということだから，その総兵員数は1万6千人ほどだったということになろうか。すると，戦場へと赴く前にダタメスが彼らに支払ったはずの日給の総額は1万6千ドラクマイとなる。これを3ヶ月分前払いにして支払ったとすると144万ドラクマイ強。莫大な金額である。これは，例えばアテナイ人がパルテノン神殿を建設するのに要した費用の約30パーセントに相当する。別の例を挙げれば，120艘の三段櫓戦艦を建造することができた金額である。

VI アテナイにおける緊急時発行偽造硬貨

しかし，兵士に給料を払えばそれで戦争が出来るといったものではない。大規模な攻城戦を1年やるには500万から800万ドラクマイほどの戦費が必要であり，ペロポネソス戦争期にアテナイが1年間に費やした戦費は1200万ドラクマイほどに達したと言われる。戦争は国を食い潰してしまうのだ。V・D・ハンセンは次のように言っている。

「ペロポネソス戦争からまなぶべき軍事的教訓とはなんだろうか。

ともかく金がかかった、ということである。ほかのギリシア都市国家がアテナイ式の海陸連携作戦を1年間つづけたら、たいていは破産しただろう。バッサイのアポロン神殿、アイギナのアファイア神殿、デルフォイのアポロン神殿は建設費に苦しみ、建造に何年もかかったが、ペロポネソス戦争のときのアテナイが1シーズンに投入した軍費だけで、この3つの神殿を1年で建設できただろう。アリストファネスは戦争国家アテナイについて、にがにがしげに、この国は不具者、失業者、すかんぴん、おいぼれ（5千人から1万人近くいたらしい）を陪審員にし、舞台を見せ、政府の書記にやとってやがる、とこぼしている。しかし、シチリア遠征に要したコストにくらべれば、遠征に参加した4万のアテナイ市民全員を完全雇用して1年間なにもさせないでおいたほうが、はるかに安上がりだったろう。』³⁴⁾

アテナイの破局の到来を決定的なものにしたのは、無謀きわまるシチリア遠征（前415～413年）におけるアテナイ艦隊の全滅と、その直後におけるスパルタのアッティカ進出であった。スパルタはアテナイ市の北東約25キロの要害デケレイアを占拠し、アテナイへの陸路を通じての物流を遮断し、ラウリオンの銀採掘場を閉鎖し、農民と奴隷の逃亡を煽った。これはアテナイの生命線を断つものであった。前411年と前404年における寡頭制支持者が起こした2回のクーデター、前404年におけるアイゴスポタモイにおける全艦隊の壊滅は、アテナイの破局を決定的なものとした。

その破局が足元に迫っていた前406～4年に、アテナイは、戦争を継続するための緊急措置として、国を挙げて、銅のうえに銀を鍍金した偽造硬貨を発行している。ラウリオンの銀採掘場がスパルタによって占拠されていたため、貨幣の素材となる銀が決定的に不足していたからである。

しかしアテナイは、もともと、古代世界を通じて最も優秀で信頼度の高

シノペー通貨変造事件

い貨幣を発行しつづけた国家であった。その硬貨の裏面に刻まれた「梟」は、どこであろうと、アテナイの威信を示す象徴として通用したのである。次の硬貨を見ていただきたい。



A0

A0 は、前330～310年頃にアテナイで発行されたテトラドラクマ（4ドラクマ）硬貨である。純銀で、重量は17.089グラムある。ソロン以後のアッティカの貨幣制度における重量単位はエウボイア制を採用したので、1ドラクマの重量は4.32グラムであった。したがって、このテトラドラクマ硬貨は標準的なものと言える。

しかし、次のサンプル A1 および A2 を見ていただきたい。



A1

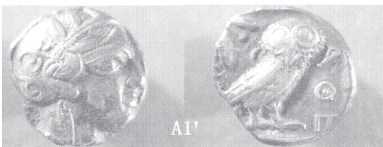


A2

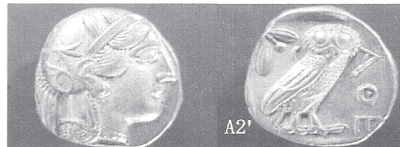
これらはいずれも前406～4年頃にアテナイが発行した「緊急時貨幣」のうちのテトラドラクマ（4ドラクマ）硬貨である。A1の重量は13.71グラム、A2のそれは12.98グラムである。

次に A1' および A2' を見ていただきたい。

これらは本物のテトラドラクマである。A1' は前415年頃発行されたも



A1'



A2'

ので重量は17.12グラム、A2'は前420年頃に発行されたもので17.19グラムある。A1 と A1' とでは3.41グラムの差があり、A2 と A2' とでは4.21グラムの差がある。したがって、上のサンプルでは贋物と本物の間には平均して3.81グラムの差があることになる。これは、銅のうえに銀を被せたものと純銀のものとの差である。A1 にも A2 にも、例のパラハラッテインの痕跡は認められないことに注意しよう。A1 および A2 が贋物であることは、銀の鍍金に剥落（A1）や芯金の銅が露出していること（A2）によって、それぞれに明らかである。しかし、それは現在だから言えることで、発行された当時であっては、一見してそれらは本物と見分けがつかなかったであろう。しかし重量測定にかければ、それらが贋物であることはただちに判明したはずである。しかしもっと安易な方法は、ふつう人々がよくやるように、それらを「咬んでみる」ことであろう。

ペロポネソス戦争末期におけるアテナイの「緊急時発行貨幣」は、前405年のレナイア祭において上演された『蛙』（718－726行）のなかで喜劇作家アリストファネスが

わたしはしばしば考えた、われらが市は
立派な紳士の市民らを
古鑄貨幣と新しい金貨と同じに扱うと。
これは少しも混ぜもののない
お金のなかで一等の、正真正銘、
ギリシアにあっても外国でも、
あらゆるところで造られた、たった一つの立派な貨幣、
これをばわれらは使わずに、銅の悪貨を使っている、
ついこのあいだ作られた、お金のなかでの最悪品³⁵⁾

シノペー通貨変造事件

とコロス（合唱隊）に歌わせ苦々しげに言及したものであったが、戦時下における緊急贋造貨幣発行は、アテナイをもって嚆矢としない。ヘロドトスは、『歴史』第3巻56において、スパルタ軍がサモスを40間にわたって攻囲したときの模様を語っている。そのなかで彼は「あまり信の置けぬ説だが」と断りながら、サモスの僭主ポリュクラテスが「鉛に金を被せた土地の通貨を大量に造らせ、これをスパルタ軍に与えた」という話を伝えている³⁶⁾。窮余の一策という点ではアテナイの場合と同じであったろう。しかし、さすがにアテナイはプライドが高く、戦後の前403～2年になると、「緊急時発行貨幣」の流通を差し止め、ふたたび純銀硬貨を発行しはじめている。

アテナイの「緊急時発行貨幣」に「バラハラクシス」の痕跡が認められるものは希少である。「贋造貨幣」であることが周知されていたからではないか。「バラハラクシス」は、真贋のほどが疑われる通貨について行われるものであって、セルトマンが主張したように、贋物を流通させないようにする措置とただちに一つのものではないのだ。

思い出していただきたい。彼は次のように言ったのである。前350年以降10年間というもの、シノペは、自国の通貨の偽物、とりわけカッパドキアの太守が発行した大量の贋造通貨によって著しく信用を傷つけられていた。これに対処するために採られた措置こそが「ディオゲネス伝」20.1においてヒケシオスに帰せられている「バラハラクシス」であった、と。セルトマンが、「バラハラクシス」とは贋造硬貨を出回らなくさせる措置である、と考えていたことは明らかである。

VII 古代アゴラ遺跡発掘碑文の語るもの

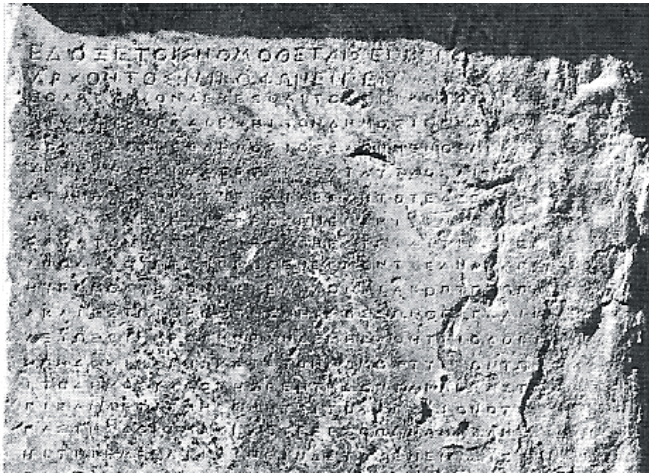
繰り返すが、「バラハラクシス」は一方ではたしかに「偽造」とか「贋造」を意味する言葉ではないが、他方において「贋造」通貨を市場から駆

逐する措置と直ちに一つのものでもない。しかしその言葉を、「変造」ないし「贋造」というほどの意味合いをこめて世間一般の人々が使うようになっていった歴史的・社会的背景はたしかに存在していたのである。ディオゲネスに帰せられている所謂「通貨変造」事件の真相に迫ろうとするわたしたちにとって、これは肝心要の論点である。この点を明確にするために、「バラハラクシス」とはいったい何であったのか、前375/4年に緊急発布されたアテナイの法令に徴して具体的に検討してみよう。

1970年に、アテナイの古代アゴラの遺跡から以下の写真印影（一部）に見られるような一つの大理石柱が出土した³⁷⁾。この大理石柱には贋造硬貨対策を主眼とする一つの法令が刻まれていた³⁸⁾。前375/4年に緊急に制定されたものと同定されている当該法令は、碑文に読みを下したR. S. シュトラウドによれば、当時のアテナイ市場に多数出まわり、アテナイの交易上の信用を傷つけて経済活動を阻害していたところの、エジプト、シリアのアルミナ、アラビア、パレスチナ、フィリスティア、ペルシア属州各地などで打刻された外国製贋造硬貨³⁹⁾を駆逐する必要があつて制定されたものと考えられている。

この碑文のなかに、「ドキマステス」(δοκιμαστής, 検査官)と呼ばれる国有奴隷⁴⁰⁾が出てくる。この役職者の職務内容はこれまでよく知られていなかったが、この碑文を読むとそれが硬貨の真贋の見極めとそれに関連する業務であることが分る。以下に当該碑文全文3分の1相当最初の部分(1~18行)の原文を掲げ、これに和訳を対照させておく。

ἔδοξε τοῖς νομοθέταις. ἐπὶ Ἴππο	ノモセタイ ⁴¹⁾ による決議。ヒッポダ
[δάμαντος]	モスがアルコン職のとき。ニコフォン
ἄρχοντος· Νικοφῶν εἶπεν·	の動議に基づく。
τὸ ἀργύριον δέχεσθαι τὸ Ἀττικὸν ὅτ	アッテिका銀貨として受け取られる



- [αν εὐρίσκητ]-
 αι ἀργυρογ καὶ ἔχη τὸν δημόσιον χα
 [ρακτῆρα. ὁ δὲ]
 5 δοκιμαστής ὁ δημόσιος καθήμενος με
 [ταξὺ τῶν τρ]-
 ἀπεζὼν δοκιμαζέτω κατὰ ταῦτα ὅσαι ἡ
 [μέραι πλήν]
 ὅταν ἡ[ι] χρημάτων καταβολή, τότε
 δὲ ἐ[ν τῷ βουλευτ]-
 ηριῳ. ἐὰν δέ τις προσενέγκῃ ξ[ε]ν
 [ικὸν ἀργύριον]
 ἔχον τὸν αὐτὸν χαρακτῆρα τῷ Ἄττι
 [κῶ]ι ἐκ[.....δ.....],
 10 ἀποδιδότω τῷ προσενεγκόντι· ἐὰν δὲ
 ὑπ[όχαλκον]
 ἢ ὑπομόλυβδον ἢ κίβδηλον, διακοπτέτω
 πα[ραυτίκ]-
 α καὶ ἔστω ἱερὸν τῆς Μητρὸς [τ]ῶν

べきものは、銀製であつて政府公認の
 [刻印を] 有するものとする。政府検
 査官 (δοκιμαστής) たる者は、国庫へ
 の金銭支払いがなされる当日⁴²⁾、そし
 てその業務を評議会執務室において執
 り行ふとき以外は、毎日、テーブルに
 着席し、これらの法に則つて、通貨検
 査業務に従事するものとする。

誰であれ、もしもアッテイカ [硬貨]
 と同じ刻印を有する外国 [製偽造硬貨]
 を持参する者があつた場合には、検査
 官は [それに見合うだけの弁済金] を
 その者に支払ふものとする。当該硬貨
 がもしも [銅] あるいは鉛の芯金を有
 する鍍金硬貨であるか、あるいは混ぜ
 物加工した硬貨である場合には、検査
 官はそれを [ただちに] 切断し、神々
 の母の聖所に奉献するべく、評議会に

- θεῶγ καὶ κ[αταβαλ]-
 λέτω ἐς τὴμ βολήν. ἐὰν δὲ μὴ καθῆτ
 [α]ι ὁ δοκι[μαστής]
 ἢ μὴ δοκιμάζηι κατὰ τὸν νόμον, τυπ
 [τ]όντων [αὐτὸν ο]-
 15 ἰ το δῆμο συλλογῆς πεντήκοντα πληγὰς
 τ[ῆι μάστι]-
 γι. ἐὰν δέ τις μὴ δέχεται τὸ ἄ[ρ]γ
 [ύρ]ιον ὃ τ[ι ἂν ὁ δοκι]-μαστής
 δοκιμάσηι, στερέσθω ὧν ἄμ [π]ωλῆι
 [ἐν ἐκεῖν]-ηι τῇι ἡμέραι.
- 委託するものとする。検査官がもしも
 その業務を法に則って執行することな
 く、あるいは硬貨の検査を法に則って
 行わない場合には、シュルロゲイス⁴³⁾
 は彼を50叩きの刑に処するものとする。
 誰であれ検査官が裁可を与えたところ
 の銀貨の受け取りを拒む者があれば、
 当該の者所有〔当〕日分売却商品は没
 収されるものとする。

さて、上記の法令によると、「ドキマステス」(δοκιμαστής, 検査官)の
 職分は「法に則って硬貨を検査する」ことにある。その検査に当たって彼
 は、

- (1) アッテイカ硬貨と同じ刻印を有する贋造硬貨を持参した者には、
 それに見合う弁済金を支払う。
- (2) 当該硬貨が銅や鉛を芯金とする鍍金硬貨ないし質を落とした贋
 造硬貨である場合は、これを切断し、その流通を差し止める措置
 を取る。
- (3) 検査を終了した硬貨の受け取りを拒む者があれば、その者が当
 日に売却する予定であった商品を没収する。

と要約される業務を執行する。

さて、これら3つの業務のいずれにも不分明な事項が含まれている。

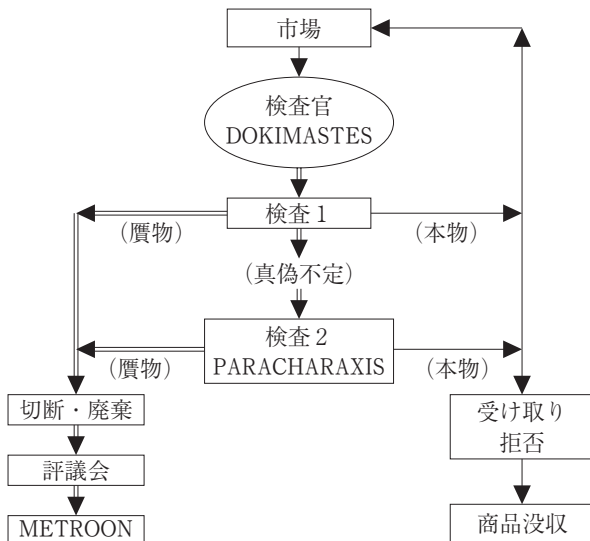
(1) は偽造硬貨摘発協力者に対する弁済金制度ないし報奨金制度の意味
 をもつものであろう。しかし分らないのは、当該硬貨が偽造硬貨であるこ

とを「ドキマステス」はどのようにして判別するのか、である。同じことは（２）についても言える。検査官は当該硬貨が銅や鉛を芯金とする鍍金硬貨ないし混ぜ物加工された硬貨であることをどのようにして見極めるのか。他方で（３）における「検査官が裁可を与えたところの銀貨の受け取りを拒む者」とはいったい何者なのか。

これらの疑問は、もしわたしたちが「ドキマステス」による検査業務の中心に「パラハラクシス」を想定し、そのうえで碑文を読み直すならば一挙に氷解するはずである。（１）において偽造硬貨と思われるものを持参する人物は、当然、自分なりに問題の硬貨の表裏の図柄、刻印、量目を本物の硬貨と比較してみて、「これは偽造硬貨ではあるまいか」と当たりをつけ⁴⁴⁾、一方ではその通貨でもって商取引する場合のリスクを考え、他方では弁済金を目当てにして、「ドキマステス」の所にやってくるだろう。すると、その硬貨を受け取った「ドキマステス」自身も、まずはその硬貨の図柄等をじっくりと視察し、さらに秤にかけて重量を調べたり、試金石を使って金属の性質を試したりするだろう。そのうえで、それが法令に定める基準値を充たすものであると確信するならば、「これは本物です。問題ありません」と言って、そのままそれを持参者に返却するだろう（検査１）。しかし、少しでも疑問があれば、彼はそれを「パラハラッティン」するだろう（検査２）。すなわち鑿で硬貨に傷をつけて真贋を試すだろう。そしてそれが偽造ないし贋造硬貨だと判明した場合には、彼はそれを没収するだろう。そして、その代わりに、硬貨を持参した人物に「それに見合う弁済金」を与えて帰らせるだろう。

（２）の前半は、いまさに述べた硬貨の真贋の見極めに関連する。当該硬貨が銅や鉛を芯金とする鍍金硬貨であるか否かは、また銀の質を落とした合金硬貨であるか否かは、「パラハラクシス」による吟味の過程を経ないでは最終的な結論を出しえない。試金石による真贋の判定は前500年

頃まで遡る。テオフラストスも『石について』（46）でこれに言及している。が、その判定は混ぜ物加工された硬貨の場合には妥当だが鍍金硬貨の場合はそうでない。硬貨の表面を擦って試金石側に残る金属の痕跡の色彩や縞模様を観察することによる判定方法だからである。表面の金属の成分はこれによって分る。しかし、この方法では硬貨の内部（芯にあたる部分）の成分は分らない。内部の成分を調べるには硬貨をカットしなければならない。他方、カットしてみて鍍金硬貨だと分れば、もはや試金石による検査は必要ないことになる。いずれにしても「パラハラクシス」による検査は欠かせないということだ。



さて、この「パラハラクシス」による吟味の過程を経て、或るものは偽造硬貨であると判定され、或るものは本物であると判定されるだろう。そして偽造硬貨であると判定されたものは、それが再び市場に出まわることのないように「切断」され、「神々の母」を祀る神殿（Metroon, メトロロー

オン)の倉庫に収蔵され、二度と日の目を見ないように厳重に管理されることになるだろう。

言うまでもないが問題の「切断」は、「パラハラクシス」とは基本的に異なる性質をもつ行為である。「パラハラクシス」はテスト行為だが、問題の「切断」はテスト結果を受けての廃棄行為である。「本物」であると判定された硬貨は持参者に返却されて再び市場に出まわり、「贋物」であると判定された硬貨は廃棄されるのである。

だとすれば(3)における「検査官が裁可を与えたところの銀貨の受け取りを拒む者」云々という文言の意味もおおのずと明らかになる。ここで「検査官が裁可を与えたところの銀貨」と呼ばれているものは、「パラハラクシス」による吟味の過程を経て「本物」だと判定された硬貨である。すなわちそれは、本物ではあるが「パラハラクシス」の鑿痕を残し、図柄(ハラクテール χαρακτήρ)を傷つけられ「顔を醜くされた」(defaced)硬貨である。が、なにしろそれは「本物」であることの「お墨付き」をもった硬貨である。嫌われなければならない理由は何もないはずだ。ところが人は、テオフラストスの言うように様々である。自分が持参した硬貨に傷をつけられた見返りを当てにして、「新品の『梟』を寄越すか、さもないれば『小銭』を上乗せしてもらいたい」とごねる、貪欲でしかも見栄っぱりな連中がいたようなのだ⁴⁵⁾。

日銀ならば傷ものの1万円札でも、その傷が許容範囲であれば、新品のお札に換えてくれる。が、当時のアテナイ政府はこの要求に応じるわけにはいかなかった。「パラハラクシス」の過程を経て「本物」と判定された硬貨1枚ごとに純銀で新品の「梟」を交換しなければならぬとすれば、アテナイの国庫はパンクするかもしれなかったのだ。当時のアテナイは慢性的インフレ状態にあった⁴⁶⁾。「誰であれ検査官が裁可を与えたところの銀貨の受け取りを拒む者があれば、当該の者所有[当]日分売却商品は没収

されるものとする」という罰則規定を設けてまで交換を禁じた理由はそこにある。

アテナイのみならず、当時のギリシア諸都市国家は、おしなべてどこも「偽造硬貨」対策に手を焼いていたのだ。その「偽造硬貨」の検査の要をなすもの、それが「パラハラクシス」だったのである。「パラハラクシス」という言葉は、元々、純粹に技術的で、硬貨の「ハラクテール」(χαρακτήρ)すなわち「刻印ないし図柄」に傷をつけてその真贋を試すということを意味していた。ところが、世間一般の人々の間では、その元来の語義が閑却され、それが「傷をつけて外観を損ない汚す」という別の意味の方へ逸れていく仕方で理解されるようになっていたのだ。こうして「パラハラクシス」とは、「貨幣の『顔』を傷つけ、汚し、価値を損なう」(deface)ことであり、ひいてはまた「通貨を変造すること」「通貨の価値を変えること」だと理解されるようになった。「通貨変造」という、本来からすれば決して正しいとは言えない「パラハラクシス」理解が世間で流布されるようになっていった背景には、このような事情があったのである。

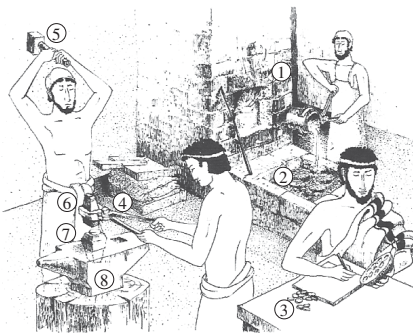
VIII 贋造硬貨の製作方法

それにしても、「贋造」硬貨は一筋縄ではいかない代物である。ひとまず当時の造幣局を訪れ、実際に硬貨を造っているところを見学し、古代ギリシア硬貨の製造方法について一通り理解しておくのが一番だろう⁴⁷⁾。

古代ギリシアの硬貨はすべて鑄造貨幣ではない。打刻貨幣である。1枚1枚、上下の母型に合わせて打ち出された手工芸品である。芸術作品と言っても過言ではない。それを模造することは極めて困難である。安易なやり方としては、本物の硬貨を粘土に写し取った表裏の型を合わせ密着させ、その間の空洞に溶融させた合金を流し込む方式がある。このやり方で造られた贋造硬貨はすぐに見破られる。硬貨表裏面に刻印される形象が概して

シノペー通貨変造事件

ソフトなものとなり，本物の打刻硬貨と比較するとシャープさが欠けていることが一目で分るからだ。おまけに鑄造硬貨の場合には表面に泡が生じたり，バリが出来たり，温度変化のために変色したり，表裏の型の合わせ目の醜い痕跡が残ったりする。これらを隠しおおすことは至難の業だ。



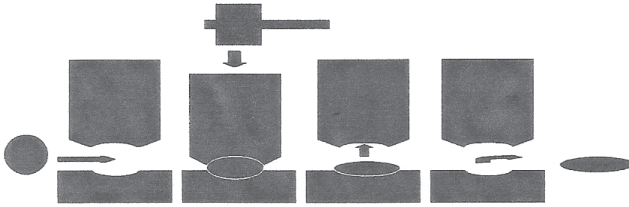
造幣局通貨製造現場復元図

- ①金属を溶融させ，純度を整える
- ②ボール型粘土製円盤に溶けた金属を注ぎこみ，ブランク（平金）を造る
- ③粘土円盤からブランク（平金）を取り出す
- ④金挟み
- ⑤一定重量のハンマー
- ⑥インキューズ（上，硬貨裏面凹型）
- ⑦ダイ（下，硬貨表面凹型）
- ⑧金床

他方，打刻模造の場合には名人芸が必要になる。そもそも原型を起こして表裏の凹型を完成すること自体がたいへんな技量を要する至難の業である。が，贋造硬貨を打ち出すときにはノーマルな硬貨を造るときには不要な作業工程が一つ加わる。しかも，それをこなすには並々でない技量が要求される。

ノーマルな打刻硬貨は，定められた重量に調製された弾丸状のブランク（平金）を，ダイ（下，硬貨表面凹型）とインキューズ（上，硬貨裏面凹型）の間に挟んで，一定重量のハンマーでインキューズの底面（上）を均一な力で打つことによって造りだされる。誤解があるかもしれないので言っておくが，冷えたブランクを打つのではない。熱したそれを冷え切る前に打つのだ。熱するのは金属の伸展性を増加させるためである。その見極めが大切である。職人芸が要求される。

他方，贋造硬貨の場合には，ブランクとして使用される銅，鉄，鉛など



の微妙な兼ね合いが肝要である。これに失敗すると、皮金が破れて芯金が露出したり、硬貨の側面の合わせ目の接着がうまいこと行かなかったりする。

もちろん、これには別のやり方もある。芯金を先に打ち出しておいて、後から皮金を被せていくやり方だ。これにはしかし、一層の名人芸が必要である。下手だと図柄のシャープさが失われる。芯金と表に被せた貴金属の間に隙間ができてぶくぶく浮いたような感じになることもある。ひどい場合には硬貨の浮き彫りの突出面、例えば正面を向いた女神の鼻先とか髪飾りの先端部分とかが破れ、そこだけ芯金が露出して醜悪な状態を呈することになる。

いま述べたやり方のヴァリエーションとして、打刻された芯金のうえに溶かした皮金を密着させる方法がある。つまり、銅や青銅を素材とする芯金を先に打ち出しておき、そのうえに銅3対銀1の割合でつくられた合金の皮金を被せ、華氏778度にまで熱するのだ。すると、融点の相違によって芯金が溶ける前に皮金が溶け、芯金の表面を完全にコーティングすることになる。この方法の利点は、先に述べた鍍金のやり方では克服することが困難であった芯金と皮金の完全密着が達成されることにある。この方法だと硬貨側面の縁の接合面もまったく目立たないものになる。さらに、使用する銀の量もごく少量に抑えることができる。利鞘を稼ごうとする贋造家にとっては堪えられない利点である。ただし、この方法で造られた贋造硬貨は、試金石検査によって容易に見破られる。表面をコーティングして

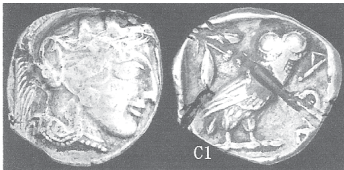
シノペー通貨変造事件

いる金属が純銀ではなく銅と銀の合金だからだ。

この欠点をカヴァーする別の方法がないではない。最初に、銀成分を比較的に多くした合金製のブランクを造る。次に、このブランクを一定の化学的方法によって酸処理（詳細は省く）し、表面に露出している銅成分を除去すると同時に結晶化した銀成分だけをブランクの表面に残すようにする。最後に、このようにしてできたブランクをダイとインキューズの間に挟んで打刻する。この方法によって完成された贋造硬貨は試金石による検査をくぐり抜ける。が、古代ギリシアでは、この方法によって造られた贋造硬貨はみつかっていない。

IX アテナイの贋造硬貨

さて、ここで元のテーマに帰り、「通貨変造」事件の真相に迫ることにしたい。以下の2つのサンプルのうち、最初に C1 の方を見ていただきたい。



C1 は、前430年頃に流通したと思われるテトラドラクマの精巧な贋造品であって、「パラハラクシス」とは何であるのかを教えてくれる貴重なサンプルである。

この贋造硬貨の重量は16.5グラムある。これは純銀でできた本物のテトラドラクマ硬貨の重量だと言ってよい。今度は、上の C1' 硬貨を見ていただきたい。C1' は前449年以降にアテナイで発行されたまぎれもなく本物のテトラドラクマである。その重量は16.52グラムである。C1 とほとんど変わらない。したがって C1 は重さの点では合格である。しかし直径は23

×27ミリで本物（23×23ミリ）よりわずかに大きい。つまり C1 は、本物の硬貨との重量差をなくすために、径を少しだけ大きくされているのだ。

この贋造硬貨を造った職人のあざとさは裏面の加工に明らかである。「パラハラクシス」の慣行を利用した彼の手口がそこに顕われている。梟の尾の斜め上のところに小さな鑿の痕が認められる。この、鑿によって硬貨の面を傷つけること、これこそ、セルトマンが「パラハラクシス」と呼んだものである。その痕跡が梟の尾の上部斜めにはっきり見てとれる。しかし、その鑿は芯金が現れるほど深く入っておらず、したがって銅の地金は露出してない。あるいは、ひょっとするとこの職人は、インキューズ（硬貨裏面凹型）そのものに始めから鑿の傷跡を付けておいたのかもしれない。そうすれば芯金が露出する心配はない。鑿痕のうえに、その傷痕を覆って銀の薄金が打刻されることになるからだ。

では、この職人は何故そのような手の込んだことをしたのか。径の大きさの違いに気付いて偽造の疑いをもつ人がいることを見越したからだ。つまり、その疑念を払拭するために予め鑿の痕跡をつけておいたのだ。「パラハラクシス」をなしうる権限をもつのは、当然、造幣局の硬貨発行責任者以外にはいない、と一般に考えられている。「パラハラクシス」とは何よりも硬貨の真贋を試す「検査官」による行為なのである。したがって、先にも言ったとおり、「パラハラクシス」による検査を通過した硬貨、つまり鑿の傷痕を残して世間に出回っている硬貨は、検査官による正真正銘の本物だというお墨付きをもらった硬貨、「折紙つき」の硬貨だということになる。この硬貨を贋造した職人は、そこまで先を見越して梟の尾のうえに鑿の傷痕を付けておいたのだ。しかし、上には上がいる。その巧妙なからくりを見破った検査官がいるのだ。梟の頸と胴の間に走る深く大きな鑿痕がその証拠となる。この一撃によって芯金の銅が露出するに至っている。

しかし、と人は問うかもしれない。贋造硬貨を本物に見せるために予め「パラハラクシス」の痕跡を付けておくなどということが可能であろうか、と。出来上がった硬貨の面を鑿で打って傷痕をつけることはできるが、インキューズの凹面に鑿を打ち込むとすれば、その鑿痕は出来上がった硬貨の表面に突出したものとなるはずで、打ち込み傷にはならないではないかと。

いや、わたしが言っているのはそういうことではない。お分かりのように、母型と出来上がった硬貨は陰と陽との関係にある。だから、インキューズの凹面の一番深いところは、打刻されて完成された硬貨では一番高いところ、例えば鼻の両眼とか嘴とかになる。母型のインキューズの図柄を彫る職人は、最初にインキューズ素材の表面を完成硬貨の「地」となる部分まで掘り下げておき、これを基準面として、図柄となる他の部分、例えばアテナ女神頭部の輪郭等を全体として凹面を形づくる仕方ですらに掘り下げていくわけだ。このとき、鑿痕を残したいと思うなら、基準面への掘り下げの段階において、はじめから鑿の形となる部分だけ掘り下げないでおけばよい。ただしこれは、図柄を避けて行うのが無難である。実際、C1の裏面を見ると、問題の鑿痕は鼻の尾を避けて、尾と並行して斜めに走っている。さて、このようにして仕上がったダイとインキューズの間に銀の皮金を被せた銅のブランクを挟んで打刻すれば、鑿痕の底面まで銀が見えるC1硬貨ができあがる寸法だ。

この方法は仕事がワンステップで完了するという利点をもつ。しかし、たいへんに手間がかかるやり方である。たぶん、実際には次の方法が取られたであろう。つまり、最初に生地のままの銅貨を打ち出しておき、これに鑿で切り込みを入れておき、そのうえから銀の皮金を慎重に被せていくというやり方がそれだ。これだと作業は3段階になる。が、仕事はむしろ簡単だろう⁴⁸⁾。

X ディオゲネスによる通貨変造事件の真相

さて、以上に述べてきたことから明らかなように、「パラハラクシス」という言葉で意味されているのは「硬貨を偽造すること」でも「偽造硬貨の廃棄」でもない。それが本来的に意味しているのは、疑わしいと思われる硬貨を吟味し真贋を見極めることである。そしてこれは、実際には部下の検査官がやることであるにはせよ、造幣局長官の重要な職掌のひとつである。ディオゲネスがこれに関与したとしても、罪に問われる謂れはないはずだ。しかし、「ディオゲネス伝」20.1, 20.2, 20.3, 20.4, 20.5, 20.6および21.1のわたしたちの読みによれば、ディオゲネスが「パラハラクシス」に関連するなにか重大なことに積極的に関与し、そのことの罪を問われて国外追放の刑に遭ったか、あるいは逃亡したことは明らかである。では、いったい、その「パラハラクシス」に関連するなにか重大なこととはどういうことであったか。このへんでそろそろ最終的な結論を出そう。

わたしたちが扱べき手がかりは3つある。その第1は、「ディオゲネス伝」20.4に

「彼は職人たちを監督する立場にあったとき、彼らによって説得され（ἀναπεισθῆναι）、デルフォイに——あるいは彼の祖国のデリオンに——赴いて、彼らから説得されたようなことを行ったものかどうか、アポロンに伺いを立てた。ところでアポロンは、ポリティコン・ノミスマ（πολιτικὸν νόμισμα 国家社会で広く通用している制度・習慣・法等）についてそれを許したのだが、彼はその意味を解しないで、硬貨に混ぜ物を加えた（τὸ κέρμα ἐκιβόηλευσε）。そして搜索を受けるにいたった（φωραθείς）。」

シノペー通貨変造事件

とあること、第2はダタメスがシノペで発行されたとされている硬貨が実際にはシノペで発行されたものではありえないと考えられること、第3はシノペで最初に自分の硬貨を発行したカッパドキアの太守はダタメスではなく彼の長男であるシュシナスだと考えられることである。

これら3つの事柄は密接に関連しあって一つの事実を指し示す。すなわち、ディオゲネスが父親ヒケシオスから預かった貨幣とは、ダタメスの死後にベルシア王から任命されてカッパドキアの太守となったシュシナスが発行したそれであったということ、そしてこれをディオゲネスは、パラハラッテインしたのみならず、「悪貨は良貨を駆逐する」(グレシャムの法則)というが、まさにそのごとく、「悪貨」を流通させることによってシュシナスのシノペ支配の威信と信用を失墜させるべく、混ぜ物をして質を落とした「シュシナス硬貨」をも発行したということである。

ディオゲネスはダタメス硬貨にはタッチしていないはずだ。ダタメスがシノペで発行したとされている硬貨は、先に指摘しておいたように、アラム語ではなくギリシア文字で「ΔΑΤΑΜΑ」と刻印されている。他方、その硬貨の図柄はシノペのものである。しかもノーマルなシノペの硬貨には必ずある「ΣΙΝΩ」の文字がない。この事実はダタメス硬貨がシノペ以外の地で発行されたものではないか、と疑わせる。

不思議なことに、わたしが調べたかぎりの「ΔΑΤΑΜΑ」と読める刻銘をもつ百枚ほどのドラクメ硬貨には、どれひとつとして「パラハラクシス」の痕跡がない。しかも、それらの硬貨はすべて、アイギナ貨幣制によるドラクメの重量基準6.18グラムをほぼ満たしている。*Recueil Général des Monnaies Grecques d'Asie Mineure* に収録されている「ΔΑΤΑΜΑ」硬貨はすべて、6.24～5.54グラムまでの範囲に納まっている。これらのうち5.54グラムの硬貨はいささか怪しいが、他の硬貨は重量基準の観点からすればノーマルである。「偽造」だとは言い切れない。この事実は、いったい、

どのように解釈されるべきであろうか。

ダタメス以前の時代にも、「パラハラクシス」の痕跡をもつ硬貨はシノペでしばしば発見されている⁴⁹⁾。その「パラハラクシス」の痕跡がダタメス硬貨には認められないという事実は、それらがシノペ以外の場所で、シノペ市民以外の者を直接の対象者として発行されたものであるとしか考えられない。

思い起こそう、ダタメスはシノペが建設した植民地アミソスを支配下に置き、その造幣局を手中にしていたらしいことを。これらの貨幣は、そのアミソスの造幣局で（あるいはダタメスが支配していたシノペ以外のどこかの場所で）、ギリシア人傭兵たちへの給料の支払い、また彼らを相手に商売する行商や土地の商人たちを主たる対象として、発行されたものなのではあるまいか。というのも、よく似たことをやった人物が他にもいたからだ。

ポリュアイノスが『戦術書』第3巻で言うところによると、アテナイの将軍ティモテオスは貨幣が不足したとき、自分の名前を刻んだ硬貨を発行したが、それを「行商たちに認めさせる一方、行商たちが駐屯地を離れる際には、銀貨との交換に応じられることを約束した。行商たちはティモテオスの言葉を信用し、將軍の刻印の押された硬貨が通用する市場を兵隊たちのために開いた。やがてティモテオスの許に貨幣が届けられると、出発する商人たちに約束どおりの銀貨が支払われた。」⁵⁰⁾。

ティモテオスの硬貨は、西郷隆盛が西南の役において宮崎で発行した「西郷札」のようなもの、つまり「軍票」に類するものであった⁵¹⁾。ダタメス硬貨もまた多分に軍票的な性格をもつものだったろう。

しかし何故ダタメスはシノペの通貨を摸したのか。もちろんそれは、黒海地方におけるシノペ貨幣に対する信用度の高さと来るべきシノペ支配を見越してのことだったろう。ダタメスは、すでに見てきたように、先手必

シノペー通貨変造事件

勝を信念とする一筋縄ではいかぬ謀略家だった。黒海南岸に勢威を張ったシノペの通貨を模した貨幣に自らの名を刻んで発行することにより、彼は一石二鳥を狙ったものと思われる。一つは、自分があたかもすでにシノペを征服したかのように見せかけることであり、いま一つはもちろん、ナポレオンやヒットラーがやったように、シノペの通貨そっくりのものを大量に発行することによって、敵国シノペの経済活動を麻痺させようとするものである。いずれも自分にとって損はない戦術である。しかし貨幣の重量をごまかして自軍の兵士を欺くことは、自分の命取りになりかねない。そこで彼は、基本的に、シノペの硬貨を模しはしたが、銀の量目をごまかした贋造硬貨は発行しなかったのである⁵²⁾。

「ΔATAMA」硬貨は、偽物であって偽物でない貨幣であった。すなわちそれは一方で偽物である。何故ならそれはシノペのデザインを盗用しているから。他方でそれは偽物でない。何故ならそれは、「ΔATAMA」という刻印をもっているから。「ΔATAMA」硬貨の出現によって、シノペの経済活動はおおいに攪乱され妨げられただろう。しかし、シノペ人はこれに対し決定的な対策を講じることはできなかったはずだ。彼はシノペ市民の埒外にいたからだ。ダタメスは最終的にシノペを征服したかもしれない。が、その年代はたぶん前364年くらいまで下がるだろう。そして、その2年後、彼はペルシア王アルタクセルクセスの息のかかったミトリダテスによって暗殺される。したがって、ダタメスによる実質的なシノペ支配はほとんどなかっただろう。彼の本拠はあくまでカッパドキアにあり、そこを拠点としてパフラゴニアやポントスに対する間接統治を行っただろう。というのは、彼はシノペだけではなくガジウラをも征服し、自分の名前を刻んだ貨幣を発行していたからである。

この間接統治方式によるシノペ支配は、ダタメスを継いでカッパドキアの太守となった長男シシュナスによっても継承されただろう。もっとも、

彼は、父親を裏切ってペルシア王アルタクセルクセスの許へ走った男だから、彼のカッパドキアならびにパフラゴニア地方の太守としての就任は、もしそれが前362年ないし361年頃のことだったとすれば、ダタメスを憎んでアリオバルザネスの息子ミトリダテスを使喚して暗殺させたペルシア王アルタクセルクセス2世の任命によるものであったはずだ。アルタクセルクセス2世は前358年までは王位にあり、その跡をアルタクセルクセス3世が継ぐことになるからである。

だとすれば、この陰険にして狡猾なペルシア王は、ダタメスについてかつて警戒したように、シシュナスが勢力を拡大して自分を凌ぐ者となることを恐れ、それなりの手を打っただろう。そしてシシュナスのほうも、当然、王に警戒心をもたせるような振る舞いは努めて隠す一方で、ペルシア王の意向を汲んでシノペ市民の直接支配には乗り出さず、彼らの自主性がある程度までは許す仕方での間接統治方式を選んだであろう。そしてそれは、15年戦争後におけるアメリカの日本統治の仕方に似たものだっただろう。こうしてシシュナスは、従来どおり貨幣発行業務をシノペの造幣局に委ねただろう。そして長官職等の役職者の選任や職員の移動についても、一応、シノペ市民に委ねたであろう。ただし、シノペ発行貨幣のうえからは「ΣΙΝΩ」の文字も発行者である長官名をも抹消させ、代わってペルシア帝国属州カッパドキアの太守である自分の名前を、ペルシア王に反逆した父親ダタメスとは異なって、ペルシア帝国の威信を示すアラム語で刻ませたであろう。

すると、ヒケシオスとディオゲネスの造幣局長官職の交代と貨幣発行業務の継承ということが起ったのは、実際には、シシュナスがシノペを支配するに至る数年前、すなわちダタメスが未だ生存していてシノペをリモート・コントロールしていた時期においてであった、と結論してよい。

この時期、シノペおよびその植民地周辺では2種類の硬貨が出回ってい

シノペー通貨変造事件

たことに注意しよう。1つはセルトマンが前4世紀第1期発行貨幣に比定した特徴をもつ正式のシノペ硬貨、すなわちその表面には河神の娘シノペの横顔が刻印され、裏面にはドルフィンの上に乗る海鷲が刻まれており、そのドルフィンの下にはシノペの国名を示す「ΣΙΝΩ (シーノー)」というギリシア文字、ならびに鷲の胴部と広げられた翼の間に当該貨幣発行責任者の刻銘をもつそれ、および、わたしたちが「ΔΑΤΑΜΑ」硬貨と呼んだそれである。「ΔΑΤΑΜΑ」硬貨の出現にもかかわらず、シシュナスがシノペを支配するに至る前362年まで、シノペの正式硬貨はとぎれることなく発行されつづけたのである。

ここで想起したいのは、ヒケシオスが造幣局長官職を退かなければならなかった下限の年代を、わたしたちが先に前359年（ヒケシオス65歳）に設定したことである。前359年は下限であった。したがって、実際には、60歳のとき（前364年）にヒケシオスが長官職を退いたのだったとしても何の不思議もないわけだ。また、この「60歳」という年齢は、プラトン『法律』篇に基づいて「市民がふつうに公務に従事しえた最長年齢」とわたしたちが推定した年齢であったこと、さらに前364年という年代は、ダタメスが実際にシノペを支配下に置いたであろう時期だったことに注意しよう。

もしもこの想定に誤りがなければ、「ΙΚΕΣΙΟ」の刻銘をもつ二種類の硬貨についてわたしが先に提起した疑い、すなわちシノペの横顔の前面に装飾船尾の図柄がない硬貨（H1', H2', H3'）は、前330年～300年に発行されたものと鑑定されているにもかかわらず、実際には第1期ないし第2期にディオゲネスの父親ヒケシオスによって発行されたものではないかという推測は、それなりの根拠をもつものであったことになるだろう。何故なら、それらの「ΙΚΕΣΙΟ」硬貨は、第2期の最後に近い頃に、当時の造幣局長官ヒケシオス、（ディオゲネスの父親）によって発行されたものと同

定されてよいことになるからだ。

それだけではない。その想定は、この頃にヒケシオスから造幣局長官職を引き継いだディオゲネスによって発行されたと思われる「ΔΙΟ」という刻印をもつドラクメ硬貨が存在するという事実をも、辻褃の合う仕方の説明しうることになるだろう。以下に掲げるサンプルを見ていただきたい。



これらのドラクメ硬貨は、いずれも前430年から330年の期間に発行されたものとされている。もちろん、このように大雑把な鑑定では、これらが実際に前364年～362年に発行されたものであることを確証することは困難である。しかし、これらの硬貨はすべて前4世紀第1期ないし第2期に発行されたものである特徴を備えている。すなわち表面のシノペの横顔の前面に装飾船尾の図柄がない。前362年以前の発行によるものであることを示す有力な証拠である。しかも、すべて本物である。そして、これらの硬貨の重量は6.09グラムから5.75グラムの範囲におさまっている。すなわち基準値をほぼ充たしている。

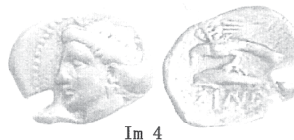
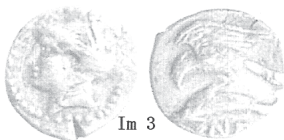
もちろん、「ΔΙΟ」（ディオ）という省略記法による刻印そのものは、ただちにそれが「ΔΙΟ（ΓΕΝΗΣ）」（ディオ [ゲネス]）の発行したものであることを確証させるものではない。しかし「ΔΙΟ」という刻印は、シノペで発行された「ΔΙΟ-」綴りの刻印をもつ他の硬貨「ΔΙΟΣΚ」「ΔΙΟΝΥΣ」「ΔΙΟΠ」「ΔΙΟΥ」とははっきり区別される。そして、「ΔΙΟ」をも含めた「ΔΙΟΣΚ」「ΔΙΟΝΥΣ」「ΔΙΟΠ」「ΔΙΟΥ」以外に「ΔΙΟ-」綴りをもつ硬貨はシノペでは発見されていない。他方で、「ΔΙΟΣΚ」「ΔΙΟΝΥΣ」「ΔΙΟΠ」「ΔΙΟΥ」ではない「ΔΙΟ」は、「ΔΙΟ（ΓΕΝΗΣ）」の省略形であると解釈す

るのがいちばん自然だ。「ΔΙΟΓΕΝΗΣ」は、「ΙΚΕΣΙΟΣ」（ヒケシオス）に比べると、ずっとありふれた名前だからだ。

この「ΔΙΟ (ΓΕΝΗΣ)」が、もしもヒケシオスの息子ディオゲネスを指すとすれば、先にわたしが提起した「ディオゲネス伝」逸話21.1ならびに20.4の解釈の正しさがさらに裏書されることになるだろう。その解釈によればディオゲネスは、(1) 父親が長官職を勤めていたときに保管していたある種の硬貨を、自分が長官となるに際し引き取って (λαμβάνω), これらに損傷を加えた (διαφθείρω) (21.1)。のみならず彼はまた、(2) ある種の硬貨に混ぜ物を加え (変造した) (τὸ κέρμα ἐκιβδήλευσε), その結果、それが露見したとき捜索を受けるにいたった (φωραθείς) (20.4) のだった。

(1) と (2) は厳密に区別されるべきである。何故なら (1) のいうある種の硬貨とは、この当時、つまり前430年～364年頃までに出回っていたシノペの贋造貨幣のことであって、これをディオゲネスは父親ヒケシオスから引き取って「損傷を加えた (διαφθείρω)」と解釈されるべきだと思われるからだ。

次のサンプルを見ていただきたい。これらはシノペで発見された夥しい数の贋造硬貨の一部だが、すべて前4世紀第1期ないし第2期発行硬貨の特徴を示している。すなわち装飾船尾の図柄がない。Im 1 は、希少な贋造硬貨である。裏面の図柄がノーマルなシノペ硬貨のそれとは異なる。左



右が逆転している。そして、ドルフィンの下文字は判読不能である。贋造硬貨であること一目瞭然である。そのことはさておき、この硬貨にはパラハラクシスの痕跡がない。重量も5.95グラムあって、アイギナ制ドラクメ硬貨基準値に達していると言ってよい。これはたぶん、シノペからかなり隔った遠方の地で偽造されたものであろう。

この奇妙な贋造硬貨を別とすると、他の硬貨の重量はすべて基準値に及ばない。Im 2は5.22グラム、Im 3は5.21グラム、Im 4は4.74グラムしかない。そしてI1を除くこれらすべての硬貨には、はっきりと鑿痕が認められる。逸話21.1における「損傷を加えた (διαφθείραι)」という文言は、これを指すものと解釈されうる。

他方、先に掲げたDio 2硬貨を改めて見ていただきたい。Dio 2には「パラハラクシス」の痕跡がある。これは何を意味するのか。自分自身が発行した硬貨に、ディオゲネス自身が「損傷を加えた」その痕跡だろうか。ありえないことだ。むしろその痕跡が意味するところは、逸話20.4におけるある種の「硬貨に混ぜ物を加えた」(τὸ κέρμα ἐκιβδήλευσε)という文言に関係づけて理解されるべきではあるまいか。

つまりそれは、前362年以降になってディオゲネスが、自分の名前の代わりに「シシュナス」の刻銘をもつ貨幣を発行しなければならなくなった状況下に置かれ、当該硬貨に「混ぜ物を加え」て発行し、そしてそのことが露見して「搜索を受けた」(φωραθείς)ときに、彼が362年以前に発行した硬貨に対してシシュナス側の役人が加えたところの「パラハラクシス」の痕跡なのではあるまいか。

すなわちDio 2硬貨に残る鑿痕は、硬貨変造の嫌疑がディオゲネスにかけられ、彼が手がけた硬貨のすべての種類、すなわち「シシュナス」硬貨と「ΔΙΟ」硬貨の双方がともにシシュナス側の役人——これは必ずしもペルシア人とはかぎらない。たぶんギリシア人の下で働く国有奴隷だっただ

— 135 —

ないのだ。にもかかわらず、重量基準を充たす3枚の例外を除き⁵⁶⁾、残る13枚の硬貨(81%)は紛れもない贋造硬貨である。何故なら、それらの平均重量は4.94グラムしかないからだ。ちなみに同じ集成に収録されているダタメス硬貨6枚の重量平均値は5.88グラム、ヒケシオス硬貨6枚のそれは同じ5.88グラムである。寡聞にしてわたしはシシュナス硬貨の銀含有率についての調査が行われたことがあるかどうかを知らない。が、シシュナス硬貨の大部分が質を落とした贋造硬貨であることは明らかだと思われる。

ここでS1に2つの鑿痕がはっきりと残っていることに改めて注目していただきたい。わたしたちはすでにこうした事例の1つを、前430年頃にアテナイで流通したと思われるテトラドラクマの精巧な贋造硬貨C1において観察している。すなわち1つの鑿痕は贋造硬貨を造った者自身が付けておいたそれ、いま1つ別の方は後からのものである。この観察から次のことが結論される。ディオゲネスはシシュナス硬貨に混ぜ物をして発行し、それを本物らしく見せるために、わざと「パラハラクシス」の痕跡(第1の鑿痕)を残しておいた。これに対し第2の鑿痕は、密告によってであろうか、そのことが露見してディオゲネスが「搜索を受けた」(φοραθείς)とき、シシュナス側の検査官がこの硬貨を廃棄処分にしたときに付けたものだ、と。

注

- 1) *Suidae Lexicon*, ed. A. Adler, Pars I-V, Stuttgart, 1929-1938; Nachdr. 1967-1971.
- 2) Plutarch, *Moralia* IX, 717C.
- 3) アッリアノス著・大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記』岩波文庫第7巻28:「アレクサンドロスは第114回オリュンピア競技の年、アテナイではヘゲシアスがアルコン在任の年(前324-23年)に死んだ。アリストプロスによれば彼の享年は32年と8ヶ月で、王位にあること12年と8ヶ月だった。」なお N. G. L. Hammond, *Alexander the Great*, King, Commander and Statesman,

Third Edition, 1996, The Cromwell Press Ltd, Melksham Wiltshire. p. 245. をも参照。

- 4) Censorinus, *De die natari*, 15.2. Marcus Porcius Cato Censorius, BC 234年-149年。古代ローマの政治家。前195年に執政官, 前184年に監察官を務め, ケンソリヌスの尊称をえた。大カトーとも呼ばれる。
- 5) ディオゲネスの母親については何も知られていない。しかし L. E. Navia, *Diogenes the Cynic*, The War against the World, Humanity Books, 2005, p. 55, n. 30 によると, アラビアの史料のひとつ (Mubassir, 65) に, ある名家の出の人物に彼の母親が賤しい家の出であることを誹られてディオゲネスが, 「わしの場合, 高貴な家系はわしから始まるのだが, おまえの場合はおまえで終わるのだ」と答えたという逸話が残されている, という。
- 6) ロングの示唆は Giannantoni, *Soc. Rel.* vol. 2, V B2A 所載の *Chronicon Paschale* に前362年頃すでにディオゲネスが有名人であったと記載されていることに基づいている。 . A. Long, 'The Socratic Tradition: Diogenes, Crates, and Hellenistic Ethics,' in *The Cynic Movement in Antiquity and Its Legacy*, edited by R. Bracht Branham and M. O. Goulet-Cazé's, Berkeley, University of California Press, 1996, p. 45.
- 7) 『国家』篇第7巻540A. なお, 山川偉也『古代ギリシアの思想』講談社学術文庫, 299-300をも参照されたし。
- 8) 『法律』篇第12巻946A-C. 加来彰俊訳。
- 9) 『法律』篇第12巻951D.
- 10) D. R. Dudley, *A History of Cynicism from Diogenes to the 6th Century A. D.*, Cambridge, 1937; Chicago, Aries Press, 1980; . F. Sayre, *Diogenes of Sinope: A Study of Greek Cynicism*, Baltimore, J. H. Furst, 1938; Luis E. Navia, *Diogenes of Sinope*, The Man in the Tub, Greenwood Press, 1998; Luis E. Navia, *Diogenes the Cynic*, The War against the World, Humanity Books, 2005;
- 11) D. R. Dudley, *Op. cit.*, pp. 2-3.
- 12) C. T. Seltman, 'Diogenes of Sinope, Son of the Banker Kikesias.', in J. Allan et al. (ed.), *Transactions of the International Numismatic Congress*, London, 1938.
- 13) アラム語が前5世紀以降ペルシア帝国の共通語であった。
- 14) 「ヒケシオス」の刻銘をもつシノペの硬貨は他にもあるが, この文脈では

以下に掲げるものを含めて総計6個だけを参考に掲げる。

- 15) これは ἄφλαστον (aphraston, ラテン語では aplustre) と呼ばれる古代戦艦の船尾の曲がった先を示す装飾であって、海戦の勝利ないし主権を象徴する装飾である。その意義については Agnes Baldwin Breet, 'The Aphlaston, Symbol of Naval Victory or Supremacy on Greek and Roman Coins' in J. Allan, H. Mattingly and E. S. G. Robinson (ed.), *Transaction of the International Numismatic Congress*, Organized and Held in London by the Royal Numismaitic Society, June 30-July 3, 1936, pp. 22-32 を参照。
- 16) それとも、これらの硬貨には元々装飾船尾があったのだが、削り落とされたのであろうか。 *Sylloge Nummorum Graecorum*, Volume IX, Part 1: The Black Sea, British Museum Press, Plate LIV は H3' をそのようなカテゴリーに属するものとして分類している。しかし、H3' をよく観察してみれば一目瞭然なように、シノペの横顔とそれを取巻くドット紋様との間には装飾船尾が元々あったようなスペースはない。他方で、H1, H2, H3 におけるシノペのイヤリングの様式は、H1', H2', H3' とは異なるように思われる。H1', H2', H3' のそれらは、 *Sylloge Nummorum Graecorum* が前410-350年シノペ発行硬貨に分類している例えば1426, 1433に酷似しているように思われる。
- 17) 以下の書物を参照。E. Schwartz, 'Diogenes der Hund und Krates der Kyniker,' In *Charakterköpfe aus der antiker Literatur*. 2 vols. Leipzig: Teubner, 1906-1911, Vol. 2, pp. 1-23; Kurt von Fritz, 'Quellenuntersuchungen zur Leben und Philosophie des Diogenes von Sinope,' *Philologus Suppl.* 18. No. 2., Leipzig, 1926, p. 20; R. Höistad, *Cynic Hero and Cynic King*, Uppsala, 1948, pp. 10-12, n. 10.
- 18) D. R. Dudley, *Op. cit.*, p. 23.
- 19) 『弁論術』の全体はそのすべての巻が一貫して同時に書かれたものではない。少なくとも第3巻の草稿は、第1巻および第2巻とは別個に、それら以前に執筆されていたものが、後になって、たぶんはアンドロニコスの手によって第1巻および第2巻と一緒にされたものと思われる。山本光雄は『弁論術』所収全3巻は「ほとんどすべてはアリストテレスの第一のアテナイ滞在期、すなわち彼がまだプラトンのアカデメイアにいる頃に書かれたものと見てよいのではなかろうか」と言っている。『アリストテレス全集16』岩波書

店「弁論術 訳者解説」319-320ページ参照。さらに、広川洋一は『プラトンの学園アカデメイア』において、アリストテレスがアカデメイアで弁論術の講義を始めたのは、「前360年頃、あるいは遅くとも前350年代最初期」であると述べ、「この講義が現存の『弁論術』の草稿の元をなしたと推定する説も有力である」と言い、「アリストテレスが少なくとも前360年から前355年の間に、プラトン時代のアカデメイアにおいて弁論術の講義と研究を行ない始めたとみることは充分可能だろう」と結論づけている。164-165ページ参照。『弁論術』全体の構成とその年代決定について確実なことは何も言えないが、上に引用した「犬」への言及がみられる第3巻第10章の全体は、少なくとも前345年には書かれてしまっていたであろう。第10章において言及されている諸文献のうちいちばん新しいのはイソクラテスの『フィリッポス』で、これは前346年に公にされたものである。しかもイソクラテスへのアリストテレスの言及の仕方は、前者がまだ存命であることを示唆している。George A. Kennedy, *Aristotle on Rhetoric, A Theory of Civic Discourse*, Newly translated with Introduction, Notes, and Appendixes, Oxford University Press, 1991, p. 304. イソクラテスは前338年に死んだ。したがって問題の第10章は、少なくとも前340年頃には執筆されてしまっていたことになるだろう。他方で、アリストテレスの「犬」への言及は、暗にディオゲネスがすっかりアテナイ社会の名物男になっていたことを示している。

- 20) ネ波斯『英雄伝』山下太郎・上村健二訳、国文社、84-93ページ。
- 21) ポリュアイノス『戦術書』戸部順一訳、国文社。
- 22) 同書341-342ページ。
- 23) 同書343ページ。
- 24) 同書337ページ。
- 25) ポリュアイノス『戦術書』341ページ。なお、偽アリストテレス著『経済学』第2巻第2章24に、ポリュアイノスと同趣旨の話が載っている。アリストテレスのほうの記事で興味が引かれるのは、ダタメスが「軍隊付属の職人や小売商人たちをひきつれていた、とあることである。岩波版『アリストテレス全集15』447-448参照。
- 26) ソロン以降のアイギナ制による商品の重量単位1タラントンは36.39kg.である。したがって、3タラントンは商品重量にして109.17kg.である。

- 27) 87-88ページ。
- 28) 89ページ。
- 29) 前掲書221-224ページ。
- 30) M. M. Austin & P. Vidal-Naquet, *Economic and Social History of Ancient Greece: An Introduction*, University of California Press, 1977, p. 332.
- 31) 同上。
- 32) ヴィクター・デイヴィス・ハンセン著／遠藤利国訳『図説 古代ギリシアの戦い』東洋書林, 297ページ。
- 33) 前掲書89-90ページ。
- 34) ハンセン, 前掲書159ページ。
- 35) 高津春繁訳『ギリシア喜劇Ⅱ』ちくま文庫364ページ。なお、アリストファネスは『女の議会』(813行以下)においても「紺gは誰も銅貨は受け取らぬこと。銀貨のみ有効とする」という法令決議に関する言及を残している。アリストファネスの『女の議会』は前392年に上演されたと K. J. Dover, *Aristophanic Comedy*, Berkeley and Los Angeles, 1972, p. 190 によって同定されている。そしてこの法令は、コノンがペルシアから大量の金をアテナイに持って帰った(前393年)直後に出されたものと推定されている。注58の R. S. Stroud 論文172ページ注51参照。
- 36) 松平千秋訳『歴史』Ⅲ, 56, 岩波文庫, 上巻318ページ。ヘロドトス自身は「あまり信の置けぬ説」と言って紹介しているが、前550-525年頃の鉛を芯金とする金メッキないし銀メッキ硬貨が5枚見つかっている。Ronald S. Stroud, 'An Athenian Law of Silver Coinage,' in *Hesperia* 43, 1974, p. 172. サモス以外の他の地域においてもこうした贋造貨幣は見つかっている。その事例についても Stroud 同論文 p. 172 参照。
- 37) この碑文印影は Stroud 論文に拠らず, *Coins & Numismatics*, Hellenic Ministry of Culture, Numismatic Museum, Athens, 1996, p. 83 に拠った。なおここに提示されているのは、以下の論述に特に関係する当該法令 1-18行相当部分であって、全体ではない。
- 38) R. S. Stroud, 'Marble Stele from the Athenian Agora,' in *Hesperia* 43, 1974, pp. 157-188.; Cf. M. M. Austin & P. Vidal-Naquet, *Economic and Social History of Ancient Greece: An Introduction*, University of California Press, 1977., pp. 328-

- 330.. なお、以下に掲げる碑文ギリシア語テキストは、P. J. Rhodes and Robin Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*, Oxford University Press, 2003 所収 ‘Athenian law on approvers of silver coinage, 375/4,’ pp. 112-118 に拠るものであって、Stroud 論文に拠るものではない。筆者に Stroud 論文ならびに ‘Athenian law on approvers of silver coinage, 375/4’ 資料を提供して下さった鹿児島大学教育学部伊藤正教授に厚く御礼申し上げる。
- 39) E. T. Newell, *Miscellanea Numismatica: Cyrene to India: Numismatic Notes and Monographs*, LXXXII, 1938, pp. 53-75; E. S. Robinson, *Num. Chron.*, VII (sixth series), 1947, p. 115; D. Schlumberger, *Trésors monétaires d’Afghanistan: Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan*, XIC, 1953, pp. 1-30.; R. S. Stroud, *Op. cit.*, p. 170.
- 40) 「ドキマステス」が国有奴隷であったという事実に関連して、誤解を防いでおきたい。読者のなかにはこの事実を、ディオゲネスその人に短絡的に結びつけて、ディオゲネスは国有奴隷であったのではないかと考える人があられるかもしれない。そうではない。引用した上記碑文の最後の方まで読めばその疑問は氷解する。そこでは、造幣局で働く他の職人たちに給料支払いがなされるのと同じ財源から「ドキマステス」の給料も支払われると言われている。「ドキマステス」は造幣局長官の支配下にある職員の一人なのである。
- 41) 毎年、陪審員たちのなかから選抜され就任した立法府の役人たち。
- 42) アリストテレス『アテナイ人の国政』第47章5－第48章2を参照。
- 43) 「シュロゲイス」は評議会員から選出された30人の役職者でさまざまな政策決定や祭儀に関わる業務に就いた者たちであるが、その詳細はよく分らない。
- 44) テオフラストス『人さまざま』森進一訳、岩波文庫、Theophrastus, *Characters*, LCL 225, 4.13に、誰かから銀貨を受け取って「こいつは軽すぎますな」と言って突っ返し、別のものと取り替えるよう要求する男が出てくる。もちろんこれは贋金であると考えてのことである。.
- 45) Theophrastus, *Characters*, LCL 225, 30.15.における「銅貨」を「銀貨」に換えるときの差額を余分に要求する「貪欲な」人間と21.5における「一ムナの負債を返すときに新品の銀貨を支払う」人間を足して二で割ったような人間を、この場合の状況に想定してみたい。つまり、その鑿痕を残す硬貨を、

歌舞伎の「与^よ話^わ情^{なさけ}浮^{うき}名^な横^{よこ}櫛^{くし}」の場、蝙蝠^{こうもり}安^{やす}と一緒に小^こ銭^{ぜに}を強^{ゆすり}請^{すり}に入^いった妾^{めかけ}宅^{たく}に、かつて自分の女^{おんな}だっ^たたお富^{とみ}が困^{こま}われ者^{もの}になっ^て暮^くらして^いるのを見^みた
与三郎^{よさんろう}がお富^{とみ}に向^{むか}かっ^て、「もし、御新造^{ごしんぞう}さんえ、おかみさんえ、お富^{とみ}さん
え、イヤサお富^{とみ}、久^{ひさ}しぶり^だな^あ」と啖^{たん}呵^かを切^きる、その「切^きられ^と与三郎^{よさんろう}」を
見^みたお富^{とみ}さん^みた^いに毛^け嫌^{きら}い^して、「これ嫌^{きら}だ。商^{しょう}売^{ばい}する^のに縁^{ゆかり}起^おい^い悪い。無^む
傷^{きず}の『梟^う』に替^かえておくれ」とごね^なが^ら、その実^{じつ}、「小^こ銭^{ぜに}」の上^{うへ}乗^{のり}せを要^{よう}
求^{もと}する人^{ひと}々^々が往^い々^々に^して^いた^らしいのである。

- 46) R. S. Stroud 前掲論文186-7ページ参照。
- 47) *Coins & Numismatics*, Hellenic Ministry of Culture, Numismatic Museum, Athens, 1996, p. 81 に拠る。
- 48) 日本刀に付属する小道具の一つに「鉏^き（はばき）」というものがある。こ
れは、刀剣の茎（なかご）部分を柄（つか）に固定する一方で鞘の鯉口^{こぐち}に合
わせて刀身をびたつと収めて固定するために不可欠な金具である。その外装
は金ないし銀であるのが普通である。しかし、銀無垢^{ぎんむこ}はともかく芯^こまで金無
垢^{むこ}であるのは珍しい。非常に高価なものになるからだ。その台^{だい}はたい^い銅^{どう}
で造^{つく}られる。鉏師^{きし}は、整形^{せいせい}した銅製の台^{だい}のう^えに袋状^{ふくろじょう}にした金や銀の薄金^{はくご}を
「着^きせて」いく。接着剤^{けつじょうざい}などは一切^{いっけい}使^{つか}わ^ない。金銀特有^{きんぎんとく}の伸^の展^{てん}性^{せい}を生^はか^して
一分^{いちぶん}の隙間^{ひま}もなく密着^{みせき}させる。日本の職人技^{しやくじんぎ}の極地^{ごくち}とも言^いえるが、ギリシア
にもそれに勝^かるとも劣^{おと}らない技量^{ぎりょう}の持ち主^{もちぬし}が^いた^わけである。
- 49) 例えば *Recueil Général des Monnaies Grecques d'Asie Mineure* 所収 Paphlago-
nia, Sinope の部類^{ぶるい}のうち、9, 16, 20; *Sylloge Nummorum Graecorum*, Paphlago-
nia, Sinope の部類^{ぶるい}のうち、1360, 1479, 1393 など。
- 50) ポリュアイノス前掲書151ページ参照。
- 51) 軍票「西郷札」をネタ^{ネタ}にして松本清張^{まつもとせいさう}は短編小説『西郷札』を書^かいた。
- 52) 先に言及^{げん及}したティモテオスは贗造硬貨^{ごうぞうこうが}を発行^{はつぎやう}した。ポリュアイノスによる
と「ペルディッカスに加勢^{かぜい}してカルキディケ人^{かるきでいけにん}と戦^{いくさ}っていたティモテオスは、
キュプロスの銅^{どう}をマケドニア銀貨^{ぎんが}に混^まぜて新硬貨^{しんこうが}を鑄造^{ちうぞう}した。5ドラクマ銀
貨^{ぎんが}の銀^{ぎん}の含有率^{こうやうりつ}は4分の1に落^おち、残^{のこ}りは価値^{かち}の低^ひい銅^{どう}だけという代物^{しろもの}であ
ったが、このようにして給金支払い^{きんしんしはい}のための大量^{たくりやう}の貨幣^{かへい}を造^{つく}る一方^{いっぽう}、ティモ
テオスは、行商^{ぎやうしやう}や土地^{ちど}の商人^{しやうにん}に、この銅貨^{どうが}で品物^{しんぶつ}を売^うるよう説得^{せつとく}に廻^{まわ}った。
お互^{おたが}いの品物^{しんぶつ}を売^う買^かする際^{さい}、彼^{かれ}らはこの新貨幣^{しんかへい}の混^まざるのを避^さけられ^なかつ

シノペー通貨変造事件

たが、それは給金としてふたたび兵隊の手に戻った。」(『戦術書』154-155ページ) この後の経緯をポリュアイノスは伝えていないが、贋造硬貨を手にした兵士たちは当然不平を鳴らしたであろう。そして純銀の硬貨との交換を要求したであろう。なお、偽アリストテレス著『経済学』第2巻第2章23は、ポリュアイノスが報告するこの同じ話を伝えているが、ティモテオスが造ったのは銅貨であったとしている。

- 53) Vol: XI 760.
- 54) Vol: IX 1456.
- 55) *Sylloge Nummorum Graecorum*, Sinope, 1414.
- 56) Pl. XXIV, fig. 27; 29; Löbb.

DIOGENES THE COUNTERFEITER

Hideya YAMAKAWA

According to DL6, 20-21, Diogenes of Sinope, son of Hicesias the banker, counterfeited the state coinage; and when he was detected, according to some he was banished, while according to others he voluntarily quitted the city for fear of consequences. The anecdote has its immediate connection with Diogenes the Cynic's mission “*παραχάραξον τὸ νόμισμα* (Deface the currency)”. But the scholars have suspected the truth of DL6, 20-21. However, in this paper I deface the current interpretations of DL6, 20-21 and submit another version consistent with Diogenes' cosmopolitan way of life.